

尙ほ其愛は誠に淺く小なる所に限られてをる、充る程に發揮しやうとした所が僅かに百歳の齡に達することの出来ないのは人の生命の常態である、否や、其中年の最も盛なる時に滅亡し去るものが多数である、中には母の乳房に眠りさるものさへ少なからざる次第である、若しこの短き生命が萬事の終焉であるならば、人は其運命を完うするもの一人もないと言つて差支はない、嗚呼斯くなれば人の創造は全く失敗なりと叫ばざるを得ない、こゝに於てか永生の希望ありて初めて人生の理想完成の期を待つことが出来る、現世に於ける心靈上の發達が不完全であり、遅々たるものだからと云つて喪心するに及ばない、理想と實際とが非常に隔離してをるとして落膽するに及ばない、永遠の道程に徐々として屈せず、撓まず、み行かば、いつかは神の完全に達することは疑ふべ

からざることである。永久の眞理、平和、幸福、眞正の美、調和、善、全き愛に於ける神との一致は、たとひ地上に於て到達することが出来なくとも、必ずや其完成は墳墓の彼岸に於てせらるゝことを信ぜざらんとするも能はんやである。
一千七百二十八年、フランクリンが廿三歳の頃、自己の碑銘を記したのに、

「印刷者

ベンジャミン・フランクリンの

遺骸

(其内容は裂け破れ、其文字と消金とは剝ぎ去られて、古書の表紙の如く)

こゝに蟲の飼料にとて横はる、されど著作は失はるゝこ

となかるべし、それは(彼が信せし如くに)著者に改訂増補せられ、斬新にして美妙なる改版として再び現はさるべければなり」

人を書籍に比したのは實に巧妙な比喩である、精神の性質をよく表はすことが出来てをる、吾人は動もすれば表装や用紙や印刷を本の本質的要素と考へる傾向がある、併し大切な本質の要素は畢竟靈魂、精神であることを忘れてはならぬ。

死は確かに肉體の分離である、經歷の終局である、併し吾人の思想、靈、精神的存在、我の絶滅では無いのである、吾人の目證する所に顯はるる現象でさへ明らかにこのことを證するでは無いか、精神の活動たる事業は、人生の間に活潑々として繼續するでは無いか、キリストの精神、即ちキリストは其身軀と共に葬られずして二千年

の間人間の心を改造し、革新し、歴史を更めつゝ、生きてをるでは無いか、キリストは墓より甦りたまひて今吾儕の裡に活きたまふのである、今後と雖ども滅絶したまふことはない、前に論じた所の靈魂不滅と共に、これも充分考へて價值のある不滅説と申さねばならぬ。

吾曹は無限の境より消息を得んことを樂み、之を得れば恰かも故郷の鴻音に接する想がある、神は無限永遠の時空を充實したまひ又吾曹の内界にも住みたまふを以て神によりて永遠と大知親なることを悟り、浮世の牢獄に呻吟するときもこの境界を脱する白帆と順風とを送らるゝことを知ることが出来る、實にこれは吾曹が有限と無限との妙合より成り兩者の中間に立てる爲ではある

まいか。

吾曹の生活は前後左右に透徹して、之を包容する超自然の生活と連結してをることを認むることが出来ず、見よ智識は時間、空間と真理とに於て常に有限を超絶せんことを務むるではないか、良心は義務に於ける無限を證明し、又愛に於いても無限に住するではないか、吾曹は滅すべきものと滅すべからざるものとの二元素よりなりて或は沈み、或は浮び、或は眠り或は醒め、絶息するかと思へば奮進し、外部に無常の欠乏を求めて之が爲めに勞役し、内部には無窮の饑渴を感じて之が爲めに輾轉してをる、嗚呼吾曹に神性を没せしむる勿れとマルチノーは論じてをります。

靈魂不滅説を考ふる時にいつも忘れてならないことは、吾儕が向上の心を養ふことである。如何に悲境に在るものも、苦難に惱むものも、失望と落膽の場合に遭遇するものも、靈魂の不滅にして永生

なるを思ふ時は罪を悔い、希望を有し、こゝに此世を去らんとするものにも尙ほ言ふべからざるの悦樂が心胸の裡に沸き出ることを感じるであらう。一時、一刻、一瞬も、永遠の理想的生命の完全に近づく大切なる時であるのである。

永生の信仰は、弱きものを強くならしめ、病苦あるものに其苦を忘れしめ、罪あるものに悔い改めをすゝめ、猛然振り立ちて仁愛正義のために潔よき戦をなさしめるのである。古來幾多の義人殉教者の壯烈なる行爲に、大なる慰藉となり、奮勵となりしは、永遠の生命の堅き信仰である。嚴冬寒風の肌をさくが如き間にも、心の裡には、鶯然たる春風が咲つてをるのである。殉教者の最大なるボーロは、我儕士に屬る者の狀を有かくの如く、後また天に屬る者の狀を有ん兄弟よ我これを言ん、血肉は神の國を嗣こと能はず又壞るもの

は壊ざる者を嗣こと能はず、視よ我なんぢらに奥義を告ん我儕こ
とくく寝たるには非ず我儕皆末の菰の响んとき忽瞬息間に化
せん、蓋菰ならんとき死し人よみがへりて壊す我儕もまた化すべ
ければなり、この壊る者は必ず壊ざる者を衣しぬる者は必ず死さ
る者を衣るべし、此くつる者くちざる者を衣、この死る者しなざる
者を衣んとき聖書に録して死は勝に吞れんと有に應ふべし、死よ
爾の刺は安に在や陰府よ爾の勝は安に在や、死の刺は罪なり罪の
能は律法なり、我儕をして我主イエス、キリストに由て勝を得しむ
る神に謝す、是故に我が愛する兄弟よ爾曹貞固して揺す恒に勵て
主の工を務よ蓋はなんぢら主に在て其行ところの勞の徒然から
ざるを知らばなり、哥林多前書十五章四九より五八までと云つて如
何なる場合にも満腔の喜悦を抱いて耐へ忍んでをつたのである。

天は明にして私なし。

正 成

石を以て撃殺されたる基督教最初の殉教者ステパノは聖靈に満
され、天を仰ぎ神の榮光とイエスの救を望みて従容として死地に
就いた。かく吾々は未來の希望の力は偉大なるものがあると讚美
せねばならぬ。

世路風霜、吾人練心之境也、世情冷暖、吾人忍性之地也、
世事顛倒、吾人修行之資也。

居心不淨、助我疑人、人自無心、我徒煩擾。

(十) 死の使命

一枚の有名なる繪畫がある、其は顔を畫いたものである、其掛けたある室に入れば、一見身の毛も慄つとする程怖ろしい面で、色青黒く、この世の人ならぬ幽界より出で來れるかとも見るので、暗陰の空氣に壓せられ、鬼氣に逼まられるやうに感ぜざるものはなからう、然し面上、恐怖すべきものゝ中に一種言ふべからざる微妙の或ものがあつて見るものを射り、彼を吸引するかとも思はるゝ程である、一種幽妙なる力に魔せられながら次第に其繪畫近く歩をすゝめ、懼然として恐るゝ其顔を熟視すると、何時とはなしに其面上に現はれてゐた怖ろしさは消え去り、人を震慄畏縮せしめでは止まざりし程の點は、淡靄の薄らぎ去ると同じやうになくなり

て、今や現はれ出でたる容貌は、到底言語に絶する優美高尚な、天の使である。

これは「死」を繪いたものである、死は萬民の恐れおのゝくものである、死は人生を破滅さすものである、人生の快樂幸福喜悅満足、成功盛昌富愛偉大希望等凡ゆる人生の光明なる方面のものを脅やかし、墮はし、蹂躪するものである、恐怖の王一度望めば戀人も、君主も、紅顔の美少年も、花の如き美人も、權勢を震ふ高官も、鬼をもひしぐ荒武者も、王も臣も、商人も百姓も、軍人であれ文士であれ、彼に縛せられ、名譽と快樂との最中より奪ひ去らるゝものである、この力には何物をも抵抗することが出來ない、無敵の權を有するものである、しかも凡ての人は人生を只單にこの怖ろしき死より脱るべき努力であるとなし、如何なる疾病の裡に呻吟することも衰弱

の苦るしき月日も死を免るゝことには代へられないとするのである。死に比ぶれば、いかに疲勞の劇しきも、汚なき浮世の生活も年は老ひ、節は痛み、家は貧しく、不自由の牢獄に囚はれたりとも、此等をこそ樂園とは申すなれ」とシエクスピアが歌ひし詩句は實に眞理なりと云はねばならぬのである。斯くも人は死を見て震愕し、恐怖するのである。然し人はこの死の怖ろしさを見て逃げ隠るゝことは出来ない、而して實際死の境にすゝむものには、死は凡ゆる苦痛の終極である。死の顔には破るべからざる平安がある。總ての煩悶は止まり、久遠の靜平がそこに住むのである。死位大なる幸福はないかと思はるゝ程に美麗である。死は自然の休息である。恩恵ある天則に従つて來る一の恩恵ある現象である。思を靜め心を平かにして死の前にある凡ゆるものを除き、死の後に來る凡ゆる人々

の事情を考ふることなくして死自身を考へみよ、人が勞働の中にもがき、煩悶のうちに苦しみ、轉輾反側する間の影は少しも死に見ることはない。死は美なり、平なり、安なり、靜なり、恩恵なりと云ふことは決して強辯でないことが解せらるゝであらう。疾病の苦痛、懊惱を考ふればこそ、死後の事情として彼に繫累あるものゝ悲哀を思へばこそ、死が怖ろしくも震るべきと考へらるれ、死それ自身は決して斯の如きものでない。否、全く其平常の考には反對なものである。

斯く申せばとて、死の懷に跳り入る自殺者の心を善と認むるものでない。社會心理學の一の問題として趣味深かるべきは、自殺である。一方に死は人の恐怖して措くこと能はざるものなるに關せず、死の腕に飛び込んで行くものゝ多いことは明らかなる統計の示

す所、明治四十年に於ける、明らかに外に表示することの出来る自殺者の數九千八百八十人である。其原因の如何によらず、彼等は死を生よりもよしとなし、樂となし、易しとなして自殺したことは明らかである。全体日本人は外國人よりも自殺を好む傾向がある、これは確かに宗教上の影響の相違とも見るべきである。現在の生活を穢土となし、未來生を極樂とする通俗佛教の感化は、殊に徳川時代の風俗の上に著るしく顯はされた。近松の心中ものは言はずもあれ、其外文學上の製作物に心中的文字は一の風潮をなしてをる位である。彼等は現世にて苦勞するより未來で樂しく夫婦になりたると云つたやうに考へてをる、しかしいつも吾人が忘れてならぬことは斯く心中が流行的に昌んであつた時も其心中する人は一時的興奮の状態、鋭く申せばやゝ狂氣に驅られて居ることである。

近松の淨瑠璃にて心中ものを取つて讀む時、殆んど其二人が狂して居ないことはない程である。ベークンであつたかと思ふ、烈情一も死の恐怖を壓せざるものなしと戀に炎え、憤怒に激し、失望に自暴自棄し、失敗に悶え、悔恨に熱する人が、死の懷に其命を任ずる状態は、死の恐怖など云ふとは少しも念頭にないかの如くである。烈情の前には恐怖などあるものでない、斯る人が若し之と同時に後生の快樂など唱ふる佛教の信仰に煽られたらば、寧ろ死を安しとすることは少しも怪むに足らない。しかし、人が平常の靜平に歸る時、死の恐怖は犇々と彼を襲ふてくるのである。何時、何處をみても死を怖るゝとは人の常である。アラビヤン、ナイト物語を讀んで著るしく感ずることは、殆んど其物語全體が「快樂を奪ひ、友を離す、死を終結としてをることである。彼等は死を見る

こと實に恐怖を以てしてをるのである。希臘人も亦同じやうである。ホメロスの昔いた、オヂッセ物語にオヂッセは黄泉に降り行きアヒレスの靈に會し、こゝに在りても尙ほ地上に在りし日と同じ名譽の位置に在ることを言ふて彼を慰籍めんとした所がアヒレス答ふるには、われを慰むる勿れ、われはこの黄泉の王たらんより寧ろ緑の地上にて工夫長の奴隷たらん方勝れりと。彼等が死を怖るゝ心はアヒレスの口を假りて出て來たのである。猶太人が死を怖れしことは舊約書中傳道書にも誌してある。働き得る日に勤めて働けよ、汝が行かねばならぬ墓の彼方には事業もなく、企圖もなく、智もなく、識もなし、少なくとも死は人の希望と人の日常生活の最終なりとの考を有して恐怖してをるのである。創世紀には罪業の罰として神は人に死を與えたまふたとしてをるのである。

全體この死を恐怖することは既に歴史よりも尙ほ古きものがある。死は沈黙の裡に靜かに現はれてくる。誰も之を拒み得るものなく、之を避け之より隠れ得ることは出來ない。甚だ公平にして、無慈悲に、秘密に、普遍的に生とし活けるものゝ上に及ぶのである。死は一種神秘な所がある。神秘にして暗黒なる點がある。こゝに人の種々なる想像を呼び起すのである。死の後に或る靈的の勢力があるとしたのは既にこの時より初まつてをるのである。死の王てふ言葉が適切でないかも知れない。しかし、死を擠らす暗黒の敵を、これは人生の敵である。同時に人を患む諸神の敵である。この勢力を滅し、この呪咀を解かんとして僧侶神官の類が現はれたのである。この僧侶及び神官は一方から見れば妖術者であり、又醫者である。少なくとも醫者と僧侶とは兄弟の間柄であつたことは確かである。

ある、彼等の任務と使命は殆んど同一である、一方は草本、醫藥、飲料、護符を手にしてをる他方は念呪、祈禱、呪符、神火と云つたやうなものをも有するのであるが、目ざす敵は同一である、こゝに宗教と醫術との一致がある、彼等は時には一となり、時には別々となりて其任務を完ふせんとした、今日世上に流布する迷信を考へみよ、昔時蒙昧野蠻なりし時の事が其儘に行はれてをる、醫術進み、智識啓發せる今日に於てさへ尙ほ斯る状態が續いてをるのは誠に慨歎の至りである、之を思ふても昔時暗黒に包まれてゐた時のことが思やらるゝではないか、僧侶と醫者とは種々なる方法を盡して人類の共同敵なる死と争つた、彼等は傷を癒した、痛を減じた、將に運命の手に委せられんとする子を父の腕に與えた、絶命の境に彷徨せし夫を妻に連れ歸つた、悲愁を變じて歡樂となしたこと一再に止ま

らなかつた、然し、無情なる死は飽までも無情である、人を救ひし醫師もこの最後の暗黒者に捕へられて其遺族に憂愁をのこした、他を恩恵みし僧侶も自らの命運よりは脱することが六ヶ敷く、武器も妖術も何の効をなすものでない、如何に進歩した醫學も其當時の最上の人を其最後の時より救ふに何の價值もない、茲に死を恐るゝの怖が愈々甚だしくなる、茲に想像が益々其翼をのばす。宗教上の救主と云ふことは明らかに之の思想と密接な關係を有してくる。死と罪惡とを密接な關係で説明せんとしたのは古代人の間に殆んど一貫してをるやうに思はれるのであるが、耶蘇の教を世界に宣傳した大使徒ポロ位、明晰にこの思想を述べたものは少ないであらう、彼の宗教上の中心思想は基督の十字架と其復活とであ

る否其復活にあるが、彼は先づこの思想にすゝむ基礎として罪と死と云ふことを一とみたのである。罪の價は「死なり」と云ふ者は罪なければ死なしと云ふのと同じことである。罪はアダム、エバなる人間の始祖の犯せる罪業の結果として人類全體に及んだ。これが人に死ある所以である。然るに耶蘇は如何と申せば彼は罪がない、罪なしと云ふことは彼が天然の人でないことと云ふことを包んでをらねばならぬ。彼が基督の先在的思想はこの當然なる結論である。既に罪なき人と云ふ假定の中に、彼は人でないと云ふことが包含されてをるのである。而して其復活と云ふことも亦この假定を承認すれば當然の結論でなければならぬと云ふのは、罪なきものには死のあるべき筈がない、死なきものが猶太人のために十字架に掛けられて死んだとすればこれは自家撞着ではないか、一度墓

に入れることあるも亦復活し來るべきは必然のことではなくてはならぬ。この復活せる耶蘇には決して死のあるべき筈がない。死の刺よ、陰府の勢力よ、彼等はキリストに對しては何等の危害をも及ぼすことは出來ない。嗚呼、死の王よ、今やキリストに復從するより外はない。彼は死より甦りて、總て眠れるものの甦の先驅となりたまふた。若し人キリストを受けんか彼も亦キリストと共に死を味ふの必要がない。最初の人地より出で、地につき、最後の人天より出で、天につくべきものである。第一の人によりて死の總ての人に及びし如く第二の人によりて永遠の生命の總ての人に及びなり」とは彼の福音の中心點である。キリストを信するものには死はないのであると云ふ考は非常なる喜の音である。しかし、死の運命の冷たき手はキリストを信する人の上にも及び來るのであ

る、信仰なきが故に然りしか否、否、信仰の上より申せば實に完全なりとすべきポロにも死は及んだのである、こゝに於てか、キリスト教徒の思想の上に一大變化を生じ來つたのである、それは死は一般である、一人の例外を許さない、然かも死は永久に入るの門である、死の悲哀と苦痛とは信者にはないのである、キリストを信する人には死の苦がない、死の恐怖がない、基督教信者たるものは微笑を以て死を迎へねばならぬ、死を恐るゝのは恥辱である、罪である、不敬虔の行爲である、不信仰と云はねばならぬ、復活祭と云ふのがキリスト教會に在る、それは何時でも毎年春分の次に來る満月を期點として第一の日曜日をも以て耶蘇の復活を祝するのであるが、これは一度に限らるべきものである、何時も復活を味ふことが出来る、死が即ちそれなのである、然らばキリスト教徒の死は悲

しむことは指いて喜ばねばならぬ、墓は天國の門である、葬式は凱歌を擧げて行くべき行列である、墓土は昇天の足登である、讃歌を咏じ、歡喜の聲を擧げねばならぬ、死の時は誕生の時よりも尙ほ喜ばねばならぬ、涙なく、煩なく、苦なく、心配なき世界に、久遠の生命を得るために移り行く門出である。

死に打勝つ保證は只信者にのみ約束されたのであるとして教會は唱ふるのである、然し未信者とキリストを信せざる人に向つては尙ほ恐怖の度が劇げしく感ぜらるべきである、死は久遠の滅亡に行く分岐點である、天國の鍵を握れる僧侶は如何なる哲人賢者もキリストを信せざる人は皆刑罰の悲運に滅び去ることを宣言し得ることであると思つてをる、彼等は未信者なる哲人賢者などの死は恐怖に充ちてをると稱するのである。

然しこれは事實の真相であらうか、無情もの、死は悲惨で、有情な
而かも慈愛に富める人の死は少しも悲哀なきものであらうか、信
仰なきものは苦難なくして死し、信仰あるものは愁傷多きことは
屢人の實驗する所である、必ずしも信者のみ喜んで死を迎へるの
でない、不信者は自殺をさへ喜ぶ程に死を恐れないのである、然ら
ば教會の唱ふる所は必ずしも當になるものとすることは出來な
いではないか、抑々教會は何の權威を以て、信者にのみ斯る喜を歸
したのであるか、其論する所は殆んど獨斷的で少しも理義に於て
明らかでないとして申しても差支ないのである。

「自由信仰者」とも稱すべき進歩した神學を有して今日の科學を充
分に承認する、自由思想家たちは久遠の生命は萬人の繼ぐべき特
權である、この恩惠は一人も洩るゝものなきことを説いてをる、彼

等は必ずしも名の上よりしてキリストを信するにも及ばない、キ
リストの心に叶ふ信仰と道德とさへあれば神と共に不朽の生命
を受くべきものなることを唱ふるのである、否、否、否、善人許り
でない罪惡ある人も、必ず罪惡より脱する方法神によつて授け
られ、永遠の生命に入ること信するのである。

この信仰は益々廣く世に擴がつてきた、これが世の信仰となる日
は遠からざることであらう、其時こそ、死は全く打勝たれ、墓は花を
以て滿され、死別の日は喜の日、新しき誕生の日、向上の最大時、自山
の時、人生希望の完了なる日、人の努力の報はるゝ日、悲哀と憂愁の
中より救はるゝ日、勞苦に賞酬ある日として讚歌を唱えらるゝであ
らう、今も既にこの境にすゝめる人が少なからざることであると
申してもよい。

全體死に關して吾人が考ふる時にいつも之に伴なふて考ふることは永遠の生命である、若し久遠の生命さへ確かなれば死の問題はそれと解釋さられたと云つてもよい、しかし吾人はこれにもう一層深く、廣くこの意義のある所を考へてみたいのである。死がないと想像したならば、無論永久に死せずして生きてをると云ふことは必然である、死すると云ふことが、この浮世の現生活より離れざるのならば、死せざると云ふことはこの現生活に固執してをることである、これは云はずとものことである、と云ふものがあるやも知れない、しかし先づこれを確かめて置くことは大切なことである、さて永久の現世活を繼續するならば、無論吾人はこの現世の悲惨、憂愁、苦勞、艱難を何處までも続けねばならぬかは當然のことである、世には眞正の満足がない、眞正の善に酬ひるに善惡

に報ずるに惡といつたやうに考へられないことが多い、オントなどはこれが爲めに未來生を假想せねばならぬとさへ、實際批判の中に論じてをる、其賞罰、應報の意義には誤謬がありとするも確かにこの世は善人必ずしも幸福を受けない所であることも承認して置かねばならぬ、斯る生活をいつまでもくく、果てなく繼けて行かねばならぬかと思ふたならば、死はどんなにか難有いことであるか、明瞭になるであらう。この思想と殆んど姉妹的關係があるとも思はるゝのは、永久の生命と共に永久の青春を有することの出來ないことであらう、神話に次のやうなことがある、エロスを愛してをる、チトマス(黎明)は神だちより地上に於ける不死不滅の寶物を賦與された、然し恐物よ、彼は之に伴なふ不朽の青春の賜物を乞ふことを忘れた、彼の身躰

は疲れ果て、其元氣は消耗して、年々老ひた、こゝに於て彼の不死不滅は却つて限なきの悲惨である。彼は其祈によりて自ら死することの出来ない鬱悶の裡に定罪されたのである。チトヌスならぬ吾儕も永久に老衰し、耄祿しつゝ、活力は耗損し、生活の味もいと苦らく、些少の勞も苦悶の種となる老年に至りて尙ほ重荷を負ひながら、日は暮れ前途の路は遼遠にして其際限を知らぬならば死も亦實に難有き神の恩恵なることが味はれるではないか。

序でなればこゝに述べ置きたい、それは教會の舊神學の唱ふる永遠の刑罰説である、これは神の性質から云つても、神の攝理から申しても、刑罰の性質から論じて、聖書の記事から考へても、耶蘇の宗教から見ても一として非難を受けざるることなき程の不道理、不完全なる教説であるが、こゝに死の問題と關係して考ふべきこと

は、今日でもまさか舊神學説を主唱する人で靈の滅亡を考へてはゐまい、しかし靈魂不滅と共に永遠の刑罰説を考へてをるとすれば、これは實に殘酷至極な考で如何なる人間でも斯る考に堪え得るものでない、しかも慈愛なる神が其子を斯る嚴刻慘烈なる無慈悲の極に陥れたまふことをごうして考ふるでせやうか、いかに自分の心が冷刻だからと申して其冷刻の極に極なる性質を神に歸するに至つては實に何と評してよいか、只驚ろくより外はない。死と共に人が直ちに神の御手に歸るか、それとも只現生活の一步進んだ生活に移るのであるか、其間明らかな考を定め得ないにしても久遠の生命には久遠の恩恵が伴ふでなければ、却つて所謂死んだ方がましてある、滅び行くことゝされる方が神の大なる恩恵であると云はねばならぬ、何時までも何時までも無限に弱々しき、

いたまじき苦惱多き生活を續けて行ことを只思ふだに怖るしくはないか、斯くて死の意味を考ふるなれば死が奥妙なる神の攝理のうちには置かれてゐるのは誠に感謝するより外はない。若しこの現在の生活がいかに長くとも、快心の友なく、親しき交りなく、種々なる關係に於ける楽しき間柄のものなく、子も子として兄弟も兄弟らしきものとして、親も親として最も親しき間隔てぬ交情を繼續することが出来なかつたならば生活に何等の綾文かありまじやうか、しかし之が果して永久にこの現在の生活に保證されやうか、實に怪しむべきことである。

この世界は未だ其廣漠たる部分をのこしてをる、しかし生れ來れる今日までの人幾何なりしか、これに他の生物も死がないとすれば、世界廣しと雖ども最早今日までに住する所なきに至れること

は明らかなことである、新しき後繼者のために或る場處が必要ならば死は確かにこゝにも其一の使命をなしつゝあるのである、他の時代が現出し得るために前の時代のものが席を譲つて彼方に立ち去る、強く、快活な子孫が次々に後より後にと其使命をなさんとして現出する、彼等は景色を眺むるに斬新な目を以てし、音楽をさくに新しき耳を以てし、事業をなすに新しき手を持つてくる、彼等は歡呼して其譲られたる場處に進み來り、歡迎する地上に繁殖する、舊きものゝ去るは新しきものゝ來るがためである、斯くして場處も機會も彼等に與えらるゝのである。

想像の翼に乗りて吾人が住する所を暖帯の一小島なりとせん、氣候温暖にして自然は皆其有する活力を逞ふし、草は緑に、木の葉は青く、百花爛熳たる間には蝶飛び、蜂忙はし、鳥は相に囀り、獸は野に

山に自由に快活に跳り戯むるとせん、されどこの小島は邊際を知らざる海洋にて圍繞され、其入江に船の來ることなく、港に汽笛の聲をきくことなし、小島以外の處よりは一の船も航し來らず、又航し去ることもならず、一人として外より來るものもなく、又一人として外に向つて去るものもあらず、豊饒なる地は味善き野菜を生じ、海よりは新鮮なる魚肉を供し、山よりは又美き獸肉を呈す、生活は快樂に充つ、而かも永久に不斷に大したる變化なし、一年は去りて新しき一年を迎へ、千年一日の如く過ぎ去る、年去り年來ると雖もこれ眞に一の巡環にすぎず、終りなく死なし、快樂も趣味も單に一の平凡的となり了するとせんか、これ吾人の堪えらるべき生活なるべきや。然るに之に反して朝には淡霞を破りて白帆現はれ、夕には地平線上の彼方に晝の如き烟を残して汽船没す、其來る所も

知らざれど又其去る所も明らかにすること能はず、而かも來る者も新しき智識と珍らしき産物と嶄新なる趣味を擠らし、行くものは残れるものをして云ひ知れざるの好奇心と興味とを惹き起さしめ、何時かは其未見の地を探險せざるべからずとするならば、吾人は寧ろ前きのものをとらずして後者を擇ばんとするではなからうか、この現實の人生はこの後に誌せる小島と同じものではあるまいか、今日に至るまで生れ來れる人の數は億を以て數ふべきものである、彼等は一人として死せざるものはない、絶えず知られざる處に帆を上げ、烟を残して去るのである、吾人は彼等が何處に向つて行くかを明らかにすることは出來ない、しかもこゝに言ふべからざるの眞趣味が藏されてをるではないか。

過去の歴史を繕くものは必ずや其間に偉人の活動せる状態を見

ることが出来るであらう、カーライルが英雄崇拜論を讀む人は歴史とは單に偉人の逸事にすぎざるかと怪しむ程であらう、然り偉人の歴史に大切な位置を保ちしことは明らかなことである、よし其外の要件が非常に大切な歴史の半面をなしてをること忘れてはならぬのであるが、偉人の事業は確かに歴史の半面を形成してをることは拒否すべからざることである、偉人と云ふ、全く善良なる意味のみで云ふのではない、偉人と云ふものの中には悪しき方面からも兎に角非常に卓越してをるものがあることを許さねばならぬ、而して善き意味で云ふ偉人がなせる活動と事業が文明と社會革進とに對して大貢獻をなせると反比例に、悪き意味で云ふ偉人が如何に害毒を世に流せるかは實に豫想の外であると申さねばならぬ、こゝに一つ注意して置かねばならぬことは思想

家の社會に於ける位置である、健全なる而かも進歩的なる思想家の社會的生活に感應を與えることを認むると同時に不健全なる而かもデカダンの思想家が人心の上に影響し引いて社會的生活の上に現はれてくる感化は實に慄然として怖れざるべからざるものがある、斯る人々は實に過去の歴史の上に少なからざることである、吾人にして若し死と云ふ事實がないとしたらば、斯る暴悪なる偉人と狂暴なる思想家との壓迫より如何にして脱し去ることが出来るであらうか、默想一番、この秘密を悟ることを得ば死は深き奥妙なる攝理の手に司ごられてをることが解せらるゝではあるまいか。

死なき所には一の利得もなく、一の發達もなく、一の改良もなく、一の努力となく、一の進歩もなく、一の斬新なる智もなく、一の再新的

なる意志もないであらう。新しき研究には新らたなる好奇心を要するであらう。新しき好奇心には新らたなる刺撃が必要であらう。新しき刺撃には新らたなる體制を要するであらう。人類は後より後より寄せ來り寄せ來る波浪の如く、一波の後より一波追ひ、一浪の次に一浪高まり、前のものよりも後のものは一層速く、高く突進しつゝ、すゝむのである。單に一時代の人で萬代に渡りて有効な勢力を藏してをるものはない。一時代にはかの勢力、他の時代にはこの勢力、その又次の時代には又新たな勢力と云つたやうに各時代にそれ／＼一部分的に順次新らたなる勢力が賦與せらるゝのである。

實に死の律法は發達の律法である。世界の美は正しく評價せられんために死を要求する。世界の藏されたる財寶は其發展のために

死を要求する。世界の仁慈と利便とはそれをよく活用し配賦せられんがために死を要求する。世界の榮光は萬民の目が、奇しき驚異の思を以て視らんがために死を要求する。世界の智的、道德的の壯麗宏大は、其の正しく世に解せられんがために死を要求する。地も天も同しく死を要求する。死は實に完全なる智恵と原始的愛の子である、と唱ふる人がある。實に至言である。

吾人は進化論の正當なることを認むる。全體進化論の語る所は何であるか。若し漸々進化の逕路を辿りて原始へとすゝみ行く時に、進化の各階段には或る模型、或る形式、或る者が死して一層高く貴く進歩したる模型、様式のものが生れ出ると云ふことを含んでをるのではないか。然らば進歩のある所、發達の所には死が最初より必要なる條件であつた。斯く考へ來り考へ去れば死の使命も

亦大にして且つ意義深きものなりとせねばならぬのである。

非^レ無安居也。無安心也。非^レ無足財也。無足心也。

危崖之石、先傾、掉枚之葉、先落。萬物惟平、可以長久。

親人於臨財、親人於臨難、親人於所忽、親人於酒後、

(十一) 死と復活

獨逸の文豪レツシングは、昔人は死を如何に表せしや」と題する著書中に、希臘の技藝家は死を表明するに骸骨を以てせず、睡眠の兄弟と致した、其繪畫は倒火把を手にする英才ですと論じました、其後暫時にして古代の遺物中より多くの骸骨に關したものが發見されました、然かしレツシングの論據には何等の影響する所がなかつた、否、反對に彼が理論の益々確實なことを證明しました、故にかにと云へば骸骨は死を表明するため企圖せられたのでありはせなんだのである。

埃及では宴會の席に木乃伊の映像を持ち廻るのです、其上には、飲めよ、食へよ、樂めよ、汝等も亦速やかに斯くぞ爲るべし」と書してあ

る木乃伊は彼等に人生の變遷常なきを示し、而して酒宴の歡樂者に死の眞面目なことを警醒させるためでない、否、人生を喜び歡樂の盃を飲干せよと云ふのがこのオマル、カイヤムの意味なんです。希臘人の間に於て骸骨は埃及人の酒宴に於ける木乃伊の映像と同じ意義を有してをる、人を嚴肅ならしむることとは丸で方向を異にして、寧ろ憂愁陰鬱の思想を散する爲である、この意味の最もよく表明されてるのはポスコリアルで發見された種々なる銀製の器具の中に銀盃がある、其外面に骸骨の畫が繪かれてあるので充分會得することが出来る、これ等の器具は質素純潔な趣味を表はしてをる、恐らくは古典時代の末期に屬するものなんでしょう。銀盃の上に表された骸骨は死の靈ではない、其時既に死亡してゐた聖者詩人なんです、其人々の今の有様こそ歡樂に耽れる人々を

して満開の時に薔薇を摘み、樂しめる間に人生を樂むべきことを悟らしめ、警戒せしむるものです、これはキリスト教の死者デッド舞踏に比すべき古典的のもので、事實、これは死者舞踏です、然し兩者の舞踏に顯はされた意義は非常に逕庭があります。

繪畫に表明された意義の解釋は誤謬がありません、其骸骨の上に名が記してあるのをみれば哲學者エピキルス、ツエノ、詩人アナクレオン、ソフオクレス、モスヒユス、オイリビデス、及びメナデルなんです。

甚だ奇異な演劇は西藏の神秘劇の死者デッド舞踏です、其一は一年の最終三日間に演せられます、死の年の献身式と稱せられてをる、生命を有つてをるか、の如き人形が捏粉で造られる、其内部には赤い液を充した總ての臟腑を詰込んである、この人形が萬目の集まる庭

を以て其場に準備された舞台の中央、墓場の傍に置かれる。すると突然骸骨幽霊の一群隊が其死骸を攻撃にやつてくる。これはラマ教の魔力が悪霊を制する好き時期なんです。夫故に僧侶やラマ等が出来りて種々なる儀式を施行し其魔法の結果悪霊を追拂ひます。然し、一層の勢力ある大角悪霊が顯はれ來つて終に舞台はそれの占領する所となる。此に於てか、聖者即ち佛陀の化身が救援に現はれ、敵に粉をふり散し秘密の法を修し祈禱を捧ぐる。悪霊等や骸骨靈、角のある大悪魔も彼の前に膝つきて其慈悲を願ふ。依つて佛陀の化身は其歎願を納れて共に聖食に預からせる。彼等が膝ついて彼の慈悲を願ふまに彼は手づから少さき粉を食はせ、聖水の器から少づゝ飲ましむる。これで其日の演劇が終る。

死骸は其日保存せらるゝことを禁せられてある。翌日又闘が始ま

る。祝福された芥種と他の拂ひ淨めの祈をしたのち、怖るべき悪魔が顯現する。其名を「宗教の聖王」と稱する。彼は牡牛の頭を冠り、右手に短劍、左手に人の心臓の畫像を握る。この奇怪な像は實に西藏人が昔時人の犠牲を献けた習慣を今尙ほ目撃するか、の觀を生ずる。魔神は佛陀によりて改宗され、今や佛教の保護者と化る。そして人形の犠牲で満足するやうになつたから、人は粉を捏ねて人形を造る。これが即ち西藏の敵であるから之を彼に屈從さするやうをするのである。彼は地上に在る人の象の周圍を廻り跳る。彼を刺す。係蹄で足を縛る。其四肢を他る。其胸を切斷する。血の淋漓たる心臓、肺臟其他の臟腑を取出す。この瞬時、僧侶の一群顯はれ出で跳り來つて切斷された捏粉人形の四肢五体を取つて四邊に散亂さす。其片々は再び銀皿の内に蒐められ、宗教の聖王は一口味ふて残余を

空中に投上げる、之が演劇終結の相圖で、其片々は悪魔等の争ひ執る所となる、終には観客の群集も式場に押寄せて其人形の断片を拾ふ、或者は夫を食つたり、又或人は呪符として保存するのです。骸骨を表明した最も興味多き遺物は基督世紀初代の頃に屬して不完全なる記録を有するもので、ゴリの保存するものでしやう、磁氣石に爪掘してある、而してニコデモの福音書の中に、王が生存者を支配するやうに死はサタン(悪魔王)と共に世界を統治すると書いてある思想に従つて死を骸骨として表明してある、畫は死が獅子の牽いてをる戦車に乗つてをる所なんです、これは監督ミュンテルが報知せし、不思議な形姿で而かも醜き動物が牽いてをる車が一の骸骨を越んとしてをる、又一つの骸骨は右の方に其光景を眺めてをる畫の意匠を説明したものであらう。



説明がしてある、けれども其文字は實に困難で讀にくい、屢々アブラクサス珠玉の中にあるやうなエベソ文字に似た字で書いてある、多分これはノスチック時代に屬するもので秘密宗教の暗示畫で其信者に神秘を示すものらしい、基督教に暗示畫のなかつたことから考ふれば、これは異教的ノスチックのものとして推定しても間違はあるまい。

基督教徒の塚窖には死は表明されなかつた、若し有りとするれば柩と花環、或は安息の比喩によつて表はされたに過ぎない、ホルデツチガカリクスツス及びブレエテクスタツスの墓塚にて發見した扁石には粗造な書方で車が表はしてありました、其曳棒は十字架の形となつて後方に轉してあります、これは最早乗人がないか

ら無用であるとの表號です、御者も馬もゐない、然し車の傍に鞭が
あります、書いてある字は磨滅して讀むに堪へない、只埋られし人
の名アデリウスのみは推讀することが出来る。

初代基督教徒は死自身を顧さなかつたが死と云ふ思想には路傍
の人でない、彼等の興味の集中する點は復活の希望にあります。
初代基督教徒の永遠てふ觀念は靈の存續でなく、身體の復活でし
た、これは彼等が火葬よりも埋葬を撰びました一理由です、ブルユ
デントチエスが申した言葉に

「やがて直ちに人體に適合すべき溫暖此等の骨を見舞ふべし、さ
らば靈は以前の體軀に復り、活きたる血跳り流るべし、永く墓に
腐れる不用の死骸は靈に伴なはんためにエーテルに支持され
ん、非常なる注意の塚に拂はるゝことゝ動かざる四肢に多くの

尊敬の表せらるゝことはた葬式に奢侈の盡さるゝ所以等實に
以上の理由によるものなり、清淨なる麻布を擴き乳香、沒藥を薰
らするなり、發掘せる岩石は何をか表明せんとするや、奇麗なる
紀念碑はた何ぞ、彼等に信托せられし人は只眠りたるのみ死た
るに非ざることを表明せずして何をか説明せんや……………され
ど正義のものゝは死は幸福なり、苦痛を通して道開かる、悲哀よ
り幸福にぞ導びくなり……………吾儕は堇花と多くの枝とを以て
隠れたる身體を飾らなん、碑銘に、冷き石に清き香液をも溜かな
ん」

プラトンが教へた靈魂不滅では到底單純極まる思想の人を満足
させることが出来ず、遂に復活の教理は正式に教會の採用する
所となりました、使徒信條の中に「肉體の甦……………を信ず」と讀まれま

す、かくて死の恐怖は復活の思想で追のけられました。無論この復活と云ふのは文字通りに物質的に解釋をするのです。そこで淺き凸彫刻や繪畫で直接間接に生命の再生するのを表明したのが澤山あるのを解することが出来ます。

後代に至るまで基督教徒は墓より甦り、塵は再び生命を得、身體は活ることの信仰に執着して居ました。この粗雜な物質的觀念が自然と一層精神的信仰の靈魂不滅説に進歩したのは此頃のことです。獨逸人が最も好む埋葬の歌は

“Aufstehn, Ja aufstehn

Sollst du mein Staub nach kurzer Ruh”

と云ふ文句で初まつて居る。甦りの希望がわが塵埃即ち身體に在ることは英語を談す世界の讚美歌に共通することこの獨逸のと同

じである。亞米利加の基督教徒が歌つてをる。

“Thus shall they guard my sleeping dart

And as the saviour rose

The grave again shall yield her trust

And end my deep repose.”

蘇國の宗教詩人でカルヅイニスムの信仰者ロバート・ボロツクは體の元子^{アトム}は皆大審判の日に蘇生することを詳細に歌つてをる。靈魂不滅の思想が塵埃の蘇生に關係せずして論究さるゝに至つて初めて新しく高尚な生命の觀念が顯はれました。然かし尙ほ神話的空想的の思想がまゝ表明されました。次の句はその一例です

“There is no death in heaven;

But when the christian dies,

The angels wait his parted soul

And wait it to the skies."

セオドル、パーカーは明確なる思想と鋭利なる判断とにて肉の復活、塵埃蘇生の靈魂不滅説を否認しました、其説を引用し、やう多數教會の信條には尙ほ、われは肉體の甦を信ず」と記載さる、初代に於て既に之を疑へる人多かりきされどニケーア會議は之を疑ふ人は皆咀呪さるゝことを宣言せりき、ゝゝゝ、肉體蘇生の教義は不可能にして無理なり、ゝゝゝ、冷かに硬くなれる死骸墳墓に埋められんとき何ぞこの甦を思はんや、ゝゝゝ、我は感ず人には死なしと、彼處の塵埃が覆ふ所の形骸は既にわが同胞にあらず、塵は其所に復り、人も亦彼の所に歸るべし、斯くてわが靈魂の永遠不滅を感ず、われは墓を通して天を眺む、奇蹟も、證

據も、理論も要せず、われは靈魂不滅を學はんとて塵埃の蘇生を要めず、われは永遠の生命を自覺するものなり」

初代の基督教徒が哲學思想も幼稚であり一般の教育も粗雑であつたことを考ふれば、彼等が靈魂不滅に關する思想の不完全なるのは尤な次第です、彼等には宗教が抑々魔法の一種だと考へられてゐた、昔時の繪畫をみれば直ちにこのことが明瞭になる、イエス奇蹟を行ふことの出来る表號として手に杖を携へてをられました、一人の魔法使ど書いてあります、死者復活の要求を充すのは今も昔時も同じく奇蹟の信仰であります、奇蹟さへ出来るなら、なんで形骸が生命を甦らすことの出来る理由がありませんしやうか、昔時の石棺の上に浮彫してあるのに、イエヤが五ツのパンと二尾の魚とを以て數千人を飽かしめたことを表はして居る、無論これは

美術家が第四の福音書にイエスは生命のパンなりとしてある意味でキリストを表明したものであらういや、これよりも進んでイエスは死の王の無情なる心を動かした琴を手にするオルフォイスとして表はしてある、又鯨の腹中にかくれたるヨナとして表はしてある、殊にラザロを蘇生せしめた時に其力を有つ、死生を仕配する主として表はしてある。

靈魂不滅の舊説が余りに不完全粗雑であるからと云つて其中に含有してをる真理の芽をも観過するのは正當でない、吾人は最早肉體が再び蘇生することを信じない、然し靈魂が存續して滅びるものでないとは明らかなる理性の示す所であります。

吾人の生命は吾人の思想、情操、企圖のうちにあるもので、精神的であつて物質的ではない、吾人が思考して働をなす時の物質的分子

は事業の進捗につれて廢物として放擲される、而して同じ種類の新材料によつて補充されるものです、吾人の思想は形式保存によつて記憶として保存される、形式は吾人の生理的組織の變體に残つて、精神的生命の存續を保持する、思想進歩の間になる廢物が吾人の思想そのものでないと同じやうに死者の形骸はその生命を消盡したもの、廢殘物で、人自身ではない、彼等の希望でもなければ思想でも實在でもない、體軀は死して崩壊分碎するに極つてを、然し人の意義、終生の事業、靈、其精神、存在するやうに勉めた新事實は死によりて消滅するものでない、生命ある要素は生命あるものと共に存續する、實在の祝福は箇人的精神の價値に従つて其箇人的人格の意義の中に永續するものである。

この一篇はカルス博士の論文にして、補譯してユニヴァサリスト誌上に公けにせしもの、死問題研究材料の一として掲載せり。

(十二) 悲 の 恵み (十字架の意義)

讚美歌八十一に次の句がある、

一、うつりゆく世にも

かはらでたてる

主の十字架にこそ

われはほこらめ

二、聖書のひかりは

つみをあがなふ

十字架のうへにぞ

みなあつまれる

三、おそれとなやみに

かこまるゝとも

十字架は平和と

よろこびみたり

四、十字架のうへより

さしくるひかり

ふむべきみちをば

てらしてをしふ

五、わざはひさいはい

よしあしともに

たゞ十字架にこそ

きよくせらるれ

浮世の波は逆捲き、暴風吹き荒れて沈む許りの危険な時も頼るは主の十字架、悲哀の荒野に彷徨ひ、涙の谷、死の蔭に歩む時にも唯一の慰藉たるべきはイエスの十字架、實に基督教徒に取りてイエスの十字架程尊いものはない。患難、困苦、迫害、飢餓、裸程、危険、及、劔其他死も生も天使も執政も有能も、今あるも後あらんものも高き深き一として主イエスによれる愛より離らすものなしと叫べる大使徒ポロが世に宣傳せんとしたのは唯、十字架のキリストであ

る、十字架に釘られたキリストはユダヤ人には硬く者、ギリシヤ人には愚なるものなれど神に召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも十字架のキリストは神の大能また神の智慧であると言つてをる、實に悲める人、病める人、煩悶ある人等が十字架の意味を味ふ時は必ずこゝに眞正の慰藉と安心とを見出すことが出来る、少し議論が面倒でも辛棒して讀んで頂きたい。

キリスト教は耶蘇イ、チキリストを離れて解することは仲々困難である、キリストの教訓は其行と一致符合して居る、言行一致は人の至難とする所であるが、キリストに於ては、これが一致の出来得ることを示されたのである、それでキリストの苦難をよく解することが出来なければ従つて其教訓を悟ることも六ヶ敷いといはねばならぬ。

茲に基督の臨終の光景を簡単に述べて見よう。虚偽、廢徳の極端にすゝんだ學者、宗教家、人民の間に道を傳ふること大凡二年、其弟子さへ充分に其教の眞髓を悟ることが出来ず、人民は只彼の人物の偉大崇高なるに酔ふて其教を深く味ふことも六ヶ敷い有様であつた、が罪惡に沈み、偽善に富む學者、及びパリサイ宗徒は憎惡と嫉忌とに驅られ、彼を殺さんことを謀つた、耶蘇は斯る形勢を察しながら、愛すれば愛する程憎み、爲めにすればする程恨む世の人の心が頑固なるを悲しみ、彼が眞意を傳ふべき位置に居る弟子も、尙ほ彼を解せざるを慨き、危険足下に逼れる時三人の弟子を伴ひ、ゲツセマネと云ふ園に入つて神に祈禱を捧げたまふた、この時のイエスの心中を察すれば、彼が血の涙血の汗を流して、この苦き盃を取去りたまへと天父に祈りたまふたことを悟ることが出来る、彼

は十二人の弟子の一人なる反逆者ユダから敵の手に賣られまし
た。蜘蛛の子を散す如くに師の危きをも顧みず、弟子等は逃げてし
まつた。彼に罪なければ我は關係なしと手を洗つたピラトも、人民
の狂暴を怖れては遂に無辜のイエスを十字架に釘ることを宣告
した。磔殺場と定つたゴルガタ山上の有様こそ人間の罪惡が最も
よく暴露されたと申して差支がない。十字架の下に集つた人等は
まるで血に渴ける猛獸同様で、あらゆる亂暴嘲罵の聲を發し、同じ
く列んで十字架に磔られた盜賊さへ罵り狂つて彼を嘲つてをる。
然るに彼は天の父を仰ぎ、父よ彼等の罪を許したまへ、彼等は其爲
す所を知らざればなり」と祈りつゝ、絶命されたのである。
キリストの苦難と死とに對し、吾人は屢々、彼は吾儕の爲めに死せ
り」と申します。併しながら、其意味が吾儕の代りに苦しむ死なれな

事とするならば、それは間違つた思想であると言はねばならぬ。神
は、罪なきものを罰したまふやうな不正義の神ではありません。道
徳上の責任は皆一箇人各々が自分で負ふべきもので、他のものゝ
代りに其責任を負ふと云ふことは倫理學上不道理である。たとひ
罪なきものが罪あるものゝ代りに其責任を負つて罰せられた所
が罪ある人の罪の消滅するわけは毫頭無い筈である。罪ある人は
勿論自分で心に悔い改めの經驗を味はねばならぬ。
キリストは、神が人間の罪惡を怒りたまふ故に、其罪人のために、神
の怒を解くために、犠牲となりたまふた、と申すものがあるならば、
これも神の性質を誤解してをるものと言はねばならぬ。昔時は神
の怒を柔ぐる爲めに、神の祭壇に供物を献じたり、音楽を奏したり、
舞踏をしたり、種々なる方法を盡したものであつた。現に基督の生

れたまふた猶太では人の罪の贖として、神の怒を解くが爲めに、祭壇で小羊の血を流す宗教上の儀式があつた、日本の六月、十二月、兩度神道で大祓をやるのは、これと思想が似てゐるのであります、神を人間のやうな怒つたり笑つたりする性質のものと考え、甚だしきは復讐さへするやうなものと思つてをる國民の間には、何處にも猶太人のやつたやうな、又日本人の大祓みたやうな宗教上の儀式が行はれたものです、キリストを小羊と呼んだり、十字架に血を流すことを贖罪のためだと考ふるのは、まだ、キリストの精神と神の愛とを知らざる猶太人的思想である。

キリストは吾儕のために死し給うた、即ち吾儕の利益のため苦しむ、吾儕の爲めになるために死したまひました、無論吾儕が死すべき苦痛の、身代となつて死の刑罰を受けたまふたと云ふのではな

い、イエスは吾儕のために生活したまふたと申して吾儕が生活する必要がなくなるやうに、吾儕の代りに生活したまふたのでない、彼の生涯は吾儕の利益のため、吾儕を豊富になし、感應を與へ、吾儕が爲めに役に立つやうに務めたまふたのである、死も亦其通りで吾儕人生の最大要求を充たし、吾人が智識、道德、精神の最も緊急且有用なる需用に應ずるために死したまふたのである。

神は父なりとはキリスト教の真髓である、神は愛なりといふ考はキリストが其教訓と行とによりて世に宣傳せんと務めたまふた主要の點である、彼によりて吾人は神の子であることを悟るやうになつた、併し誠に神の子として恥しくないものを求むる時は、キリストの外其人を見出すことが甚だ困難である、子を見て其父を知ることが出来るものならば、即ちキリストは其人である、キリス

トの品性は神の品性を映してをります、キリストが人類を愛して、吾儕の罪のために苦しみ悩み、吾儕の悲哀を分かち、罪惡のために傷つきたまふたことによつて、神は如何に人類の罪のために苦しみたまふかをよく知ることが出来る、キリストの一生涯は神を顯はし其榮光を輝かしたまふことに費やされた、しかも其ゲツセマネの園中に於ける舉動と、其十字架に釘けられたまふた時の有様とは最もよくそれが表現せられたのである、充分にキリストの愛の發揮されたのはこの時であつた、彼の生涯の高潮は十字架上に於て最もよく現はれたのである、こゝに十字架の最も深き意味があるのである。

一大悲劇はキリストの生涯に現はされました、キリストが血の汗を流して歎き悲みたまふ原因を探れば、世の罪の怖ろしき程に彼

を壓迫したこと、彼の愛が極端まで發展したためであり、彼は生涯を捧げて人の益を計り、愛し祝福し、其人々に神の恩恵を祈りたまひました、愛すれば愛する程恨まれ怒られ、其極十字架上に磔殺さるゝまでの憎を受けました、畢竟するに彼の眞實が人々の虚偽を責め、彼の愛が人々の無慈悲を悟らせ、彼の純白が人々の汚濁を自認さするやうになつたのが、其人々の憎怨と憤恨とを得た原因であつたのである、彼等の罪の怖ろしきことを惡み、同時に彼を愛することが深いのは、われ死ぬる許りに悲しむと思はしむ程にイエスの心に煩悶を起さしめたのである。

天の父なる神は、キリストを通じて其煩悶のあることを表現したまひました、一點の塵翳を止めざる明鏡は、僅かの汚をも寫すことが出来るやうに、神の醇の醇なる皎潔な御心には、人間のいと少さ

き罪も汚もよく寫ります。神は如何程に深く強く罪惡を憎みたまふかは説明するも困難に覺ゆる程である。又同時に人類を愛したまふ御心の御慈愛も亦無限であるが、無限の愛を蒙る人は神の無限に憎みたまふ罪を犯すのである。故に神の御心には無限の愛と無限の憎との争闘があります。この苦難に堪へたまふ神は、如何にして其愛と憎とをよく調和せしむることが出来ましやうか。愛の勝利を完うせしめたまふか、これがキリストの其苦難と死によりて人類に説明したまふ所である。神は無限に憎みたまふ罪惡の怖るべきことを、無限の愛によつて人に自覺せしむるやうになされました。詛ふ者を祝し、憎むものを善視し、虚過迫害も彼の爲めに祈禱せよ、如此するは天に在す爾曹の父の子とならんためなり。馬太傳五章四四、四五との教訓が最もよく實現され發揮されたのは

十字架上に釘られたまふた時であつた。

罪を惡む正義と罪人を愛するの愛、この二つは實に大切なものである。愛なきの正義は力なく、正義なきの愛は凌辱である。とく越とくの愛である。罪人に對してこの二つが結び付く時に、煩悶があり、苦難が在る。救済はこの苦難と煩悶との間より生れ來るのである。

キリストによりて安全な救済が世に來つたと申すのは實に之を言ふのであります。キリストが世の人を視て限りなきの同情心友愛心に動かされて、狐は穴あり空の鳥は巢あり、人の子は枕する所なしと申さるゝまでに、總ての快樂と利便とを捨て、盡したまふたこと、これが爲めに日を夜につぎて煩悶したまふたことは、おもふだに涙にむせぶのである。絶え入る許りに歎き悲み血の汗と血の涙さへ流したまふたところから、天下の人は動かされ、後世に至

るまで、其靈の感化が活きくとして働き活くるのは當然であります。十字架上に釘けられて身を殺しても天父の愛を表はしたまふたことが、人々が眞實に自らの罪の怖るべきこと憎むべきことを悟るやうになつた原因であります。神の愛の輝きはキリストを通して世に照り、暗黒の裡に彷徨ひ死の蔭に悩む罪人を醒し、失望と煩悶の裡よりアバ父よと呼ぶ歎呼の叫を發することが出来るやうになりました。重きを負へるものはわれに來れ爾曹をやすませんとの御言葉を眞正に解することが出來て、重荷は取去られ、神の子の榮を受くることが出来るやうになりました。

“It is finished! Man of sorrows!

From the cross our frailty borrows
Strength to bear and conquer thous!

“While extended there we view thee,
Mighty sufferer, draw us to thee,
Sufferer victorious”

(Dr. F. H. Hedge)

(十三) 信仰の慰め

基督教徒が苦難の中にも歡喜を感じ、悲哀の間にも希望を抱き、疾病の中にも慰藉を受け、貧困の間にも満足を感じ、死に臨みてもなほ微笑するほどの出来るのは、全く神を信するからである。天地は神の經營によりて成り、仕配によりて活動するものである。而かも其神は愛に富みたまふ神であつて、人は彼の愛の中に抱かれてをる愛子であることを信じてをります。基督教徒も亦同じ人である。傷を蒙りて痛さを感じるのは當然である。父を失ひ、妻に別れ、子に離れては悲哀の情を起すのは至情の然らしむる所である。食せざれば餓を感じる、人に乘らるれば寂寞を感じる、而かも其痛さ、其悲しさ、其寂寞、其寂寞の間に尙ほ希望と歡喜と慰藉とを心底深く感じ

てをることの出来るのは全く神の愛を信じてをるからである。無意味に天地自然の現象を観察するときには恐怖の念に打たれねばならぬ。天地は生存競争の一大活闘場、修羅の巷も斯るかと思はるゝ程である。植物に就きて見よ、一方に繁茂する者あるは一方に枯死する者あるの證である。動物界、人間界に進むに従つて戦争は慘烈を極めてをる、一の動物は他の動物を殺害して生存を完くしてをる、牀軀の大なるものは大なるとして他を害し、牀軀の小なるものは小なるとして決して大なるものに譲る所がない。時には小なるだけ其禍害の殘刻を益ものがある。バクテリア、パチルス、の如きは強大なるものに譬し、病苦に呻吟せしめ、悲酸の死を味はせ、熱涙を飲ましむるものがある。

何の爲めの地震か、數千の人を生理にすることがある、何の爲めの

海嘯か數千の家と人靈とを損することがある。何の爲めの流行病か數萬の人を犠牲とする、小なる災害、大なる禍害、嗚呼生命の世界よ何ぞ無情の甚深なることぞ、千紫萬紅の咲き亂れたる花の下には痛歎あり死がある、戲謔歡笑はやがて慈悲を求むる咽鳴の泣聲である、喝采の聲は破壊の叫である。

「神の智と識の富は深きかな、誰か主の心を知りし誰か彼と共に議ることをなせしや」と謙遜して無限なる神の前にひれ伏す信仰なきものは、必ずや厭世觀を抱かすには居られない、神の深き智慧を探ることの出来るキリスト教の信仰は讚むべきかな。神は全智なりと信する許りでない、愛なりと信じてをる、深夜人靜まり獨り床上に座して過去の生活に考へ及ぶ時、誰か自らを罪人なりと感せざるものがあらうや、盡すべきの義務を怠らざりしか

己が利益の爲めに人を奪ふことはなかりしか、心に疚ましき思念は浮べざりしか、道念の高きものは高き程罪惡を感ずるの念が強くなる、罪業を認むるの明があきらかになる、ポーロにはあらねども、われ願ふ所の善は之を行はず、反て願ざる所の惡は之を行へり、われ善を行はんと欲ふときに惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ、われ困苦人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と叫ばさるもの幾人かある。

神は愛である、碎けたる心をもつて彼に来るものは喜んで抱きたまふのである、罪業の怖ろしさにうたれ、災害の慘憺にをのゝきたるとき、アバ父よなる言葉は如何に大なる慰藉であるかは、小兒の時の無邪氣なりし日に吾儕が如何に父母に依頼して安心してをりしかを追憶せばわかる、神は悔い改めて俄に飛びこんで来るも

のを其温と愛の保護に置きたまふのである。

人若し眞に「余は全能の神を信仰す」と言ふことが出来れば、其人は「地中海は余の庭園なり、其沿岸に羅列する樹木はレバノンの香柏よりアルプスの松に至るまで悉く予が所有なり」と云ふ人よりも高き位置に居るものと申さねばならぬ。觀ふに生活の波濤荒く風激し、紛々たる苦慮に驅られ、懊惱たる霧中に徨ふや、煩悶の極は人生の風波を整理する無限の理性なきが如く思ふて、平靜なる信仰を墜さんとすること幾度ありしか、或は榮々友なき時、惴々として氣息の絶んとする時、精神萎靡せる時、財寶盡盡せる時、人は枕を高ふして安眠するに我獨り起きて働かねばならぬ時、紅顔の熱情冷却して愛想の褪めたる時、数年の經營挫折して萬望唯だ一を除せる時——一言で申せば悲惨を極めた陰雨を受けた時に尙ほ樂園の

中に安住することを記憶しながら林間に神の御聲を認め、たゞ涙にのみよりて生ずることの出来る花と果實との中に神の語りたまふことを悟れるものは如何にも少なきことであるとマルチノ―は云つてをる。

愛の神に生活の基礎をおくものは眞誠の基督教徒である宇宙の中心に理想と同情の存在を自覺し、之と和合交通せんとするのは宗教的生活の極致である。キリスト教徒はこの宗教的生活の極致を握つてをる。

こゝに大なる平安がある、慰藉がある、わが心は神と通じ、われ父にをり、父われに居ると申すことの出来る信仰の極致にすゝみ入るときは何ものゝ力か之を犯すことを敢てしましやうか、歡喜あふれ、光明滿ち、平和ならざるを得ないのであります。

(十四) 生命の主

忠實なる信者には基督は死と陰府とに打勝ち、死の力を奪ふて生命と喫ざる事とを明著にせるが故に救世主なのである。
(哥前十五章五十五以下、提後一章十)

斯る信仰の實際的本原の意味を正解せんと欲せば古代の人々には死は自然の出来事に非ずして超自然的原因の結果と考へられたるを看過することが出来ない怒れる神が刑罰として死を宣告するか(アダムが墮落の結果として全人類の墮落羅馬書五章十二以下)悪魔的勢力が疾病及び罪惡の破壊的害毒を以て人を汚すの孰れかによりて死の勢力のもとに人をもち來るのである、而して死は陰府の仕配者として人の靈魂をその牢獄に閉ら込むるのである。

されは死より救ふにはつぎの三方法のいづれにかよらねばならぬ、神の子が代理的死の代贖によりて罪ある人類を神と和睦させ、かくて彼等を罪する律法の呪より彼等を救ひ神の恩恵に入る、(か)羅三章廿四以下哥後五章十九以下加一章四、三章十三)又は彼の聖血の潔むる力によりて悪魔の罪と死との汚濁より人々を潔むるか(希九章十一以下十章十四、廿二章二十九)又は彼自らの死と復活によりて死の權威をもてるもの悪魔又は惡靈より人類を振さ去るか(希二章十四西二章十五、一章十三以下約第一書三章八)に在るのである。

第一及び第二の觀念によればキリストの復活は人類の代贖及び義とせらるゝため(羅四章廿五)第三の觀念によればキリストの復活と昇天とは陰府と死とに勝ちし證據である、斯くて彼は、生命の

主、所有者、保證者、仲保者となつたのである(使三章十五、黙一章十八、約十一章二十五、三章十三以下、彼前三章十八以下) 復活され、あげられたる基督が其信徒に生命を分つ方法は第一彼の名を信ずることを口に認はし心に信ずることを包含す(羅十章九以下、約三章十五以下、二十章三十一、十六章二十三以下) 第二彼の名による洗禮(使二章三十八) 重生の洗(多三章五、約三章五) 神秘的洗滌(哥前六章十一以五章廿六) キリストの死と其の復活とにあづかることである(羅六章一以下) 第三は主の晩餐を飲食すること(哥前十章十六以下、十一章二十三以下、約六章五十一以下、黙三章二十、十章九) である。

新約全書に於て讀むが如き世界の救主としての基督の表明と同じきものを他に求めんとすれば宗教歴史中其類例に乏しからぬ

のである、信仰あるものゝ不相當なる苦難は罪人の救済のための代贖なりとの信仰は既にバビロン浮囚時の豫言者によつて唱へ初められたのである(以賽亞五十三章参照) 而してマカビー時代よりしてパリサイ宗の神學に唱道せられたのである。

マカビー第四書として知られたる希臘的猶太の書籍はマカビー時代の將に死せんとする勇者次の祈禱をなせることを誌るし(第六章二十九)

「わが血を潔めの犠牲となし、わが靈を彼等の贖として受けよ」 其第十七章二十二節には次の句がある、

「彼等聖人の血と死の代贖とによりて神はイスラエルを救へり」 斯る代贖的思想は猶太及び異教國民の中に存せし宗教の禮拜に於て動物の犠牲を供することに表明せられたのである、一方に於

てはこは見るべき死刑施行の代理として考へられ、其働によりて人と神との間に破れたる関係を再設するに神の正義の代理的満足として用ひられたのである。又他の方面に於ては潔めの方ある方法として用ひらるゝとは聖なる力は殊に肉に顯はされ、犠牲の血は神と交ることを妨ぐる不浄を潔むると考へられたのである。希臘人の關にも怒れる神々と豎とに和解せんがための贖罪的儀式と惡靈によりてなされたる危害汚濁を潔むるの方法とは猶太の其と殆んど擇ぶところがない。以上兩事情のために獻げらるゝ動物の犠牲、又殆んど特別の場合なるが人の犠牲の死は市及び人の代贖をなすものなりと考へられたのである。

雅典に於てはタルゲリア(アポロとデアナの爲に)の春の祭に二人の罪人は嚴肅なる行列により街を導びかれて果は代贖として石

にてか或は火にてか死刑を施さるゝのである。之と同じ儀式は公けの災難起る時アプデラ及びマツシリアに於て年々行はるゝのであるが、小亞細亞のアイオニツ市に於ては普通人間のかはりとして動物の犠牲を捧げ、かくて犠牲の殺戮は聖杖を以て打つことによつて顯はされつゝ、表號的に行はるゝのである。人のかはりとして動物を捧ぐることはアブラハムによつてイサクを捧げアガムノンによつてイフイゲニアを捧げしことの例を以ても知るべきである。されどこの代理は凡ての異教的セマイト人種中に實行されたるに非ず、能く知られたる事蹟を云へばイスラエル王の時カナ人は彼等の初生兒をモロクに燔祭として捧げしことがある。降つてエレミアの時に至るまで豫言者等は根本的に斯る惡習慣を滅絶せんことのために戦ふたのである。然り然れども人

間を犠牲に供して罪の代贖をなすとの思想は深くセマイト人の宗教に根ざせり、否犠牲は其位置と価値とが高ければそれだけ多くの効果あるべしと考へられたのである。

ビブルスのフィロが語る所によると市及び人民の仕配者が大危難の起る毎に其愛子を全人民のために悪靈に捧げたことが古き舊慣であると、斯くて捧げられた子は神秘的儀式によつて殺さるゝと云ふことである。

王子を犠牲とした一例は列王記略後書第三章廿七に於てモアブ王のことに關して誌された記事がある。又かのカルタゴ人がアガトクレス(紀元前三百〇八年)によつて破られ其市を圍まれしことをパール神の怒となす、そは彼等は貴族の子を犠牲とすべき筈のものを奴隷の子に代らしめたるが故なりとするときく、されは彼

等の最も高き貴族の子百人を赤銅の像の焙口に投入して神に和解せんことを企てられたのである、而して其數は遂に自由獻身者出て來れるによりて三百人に増加せりと云ふ、この恐怖すべき習慣は羅馬政府の壓迫によりて之を制止せしに關らずテルツリアン帝の頃までカルタゴ人中に残りしと云ひ傳へて居る。

王子の獻身は殊に有功なりとの意見は王は神の化身なりてふ信仰と大なる關係が有る、斯る場合に於て神に捧げらるゝものは神かばた半神なり、而してこのことたる吾人を導びきて神秘の根底たる死し而して甦る神の根本觀念に到達せしむるのである。其本原の形に於てはそは宗教的口牌と習慣に於ける最も古き要素の一である、而して毎年植物が秋に於て死し春に於て再生することに基づくものがある、斯る自然の現象をみて小兒らしき想像は靈及

び神々が自然の上に働く運命とみ、これに相當したる悲哀及び喜悅を表明する禮拜の活動を惹起するのである。されどこの禮拜の動作たる單なる表號に非ずして、自然に於ける脅迫的毎年の神生の破壊力を除き、其勝利ある甦生を助くる魔法的方便として企圖したのである。

この原始信仰は保存せられて殆んど孰れの地にも、五月女王メネトの如き春祭として或は穀靈の人格化たる「穀母」又は「處女」の收穫祭等の祝として冬及び死を追ひ拂ふやうの通俗習慣となつた。然り此等の一般的に弘布されたる原始的觀念と習慣とよりして小亞細亞、埃及及び希臘に於ては一層明晰なる神の死及び再來の神話が發達し來たのである。無論この神の生活は年々再現し來る祝祭の儀式によりて表明せられたのである。自然的發達の間に自然生活の

保存は箇人的死後の生命を保存する必要によつて覆はれたのである。されば原始は植物の年毎に死して又復生すること或は其中にある靈又は神たちの死して又復活することに關したることが新參のものに未來生を保證する神秘の表號又は神秘的意味となつたのである。

埃及のイシス神秘儀式はもと植物の神オシリスの神話に基けるものである。オシリスは其兄弟にして焦るが如き夏の暑の靈鬼なるセトに殺された。而して後死者の王及び判官として地下界を統御したのである。されど其敵なるセトと殺戮して其仇を酬ひしネホルスに於て再生した。この神話は毎年アチルの月十一月十七日より二十日に至る秋祭の時宗教劇によつて記念せられたのである。初めはオシリスの死せる日即ち十七日に葬儀あり、次に彼の身

体は其姉妹にして妻なるイシスによつて見出されたる日即ち第三日目十九日に於て祝祭がある、これと似通ひたるはアドニス之死である、彼はビブルスに於て毎年春祭の時婦人等の悲愁によつて初まり其翌日は彼の復活と昇天の祝賀祭を舉行さるゝのである(ルシアンノド、デア、シラ六参照)他の傳説によればアドニスはペルセフォネと同じやうに地下に於て其一年の半を其他の半年は地上に於て其戀人アフロヂテ(アスタルテ)と生活するやうになされたのである。

シリヤに於てアドニスによりてなされたる部分はフリギアに於ては「大母」チベレに愛されたるアチスによりて代表せられたのである、春分の祝祭は四日間續きてアチスのために施行せらるゝ、第一日は去勢によりて死せる神の死は輓歌によつて哀悼されたの

である、表號的には借其腕を傷け其流るゝ血を犠牲の献物となし又同時に他の者等は任意に去勢して神の従者の列に入り次に第四日に於て「喜の祭」がある、これ神の復活祭なりと、この時僧は膏を以て愁めるものゝ唇を塗り、次の言を宣したのである。

「信仰篤きものよ喜べ、神は救はれたり、われらも亦、われらの悲哀に救助を見出さん」

デメタルとペルセフォネの神秘祭に於ては其根底をたゞけば同じ神話である、されどこの場合に在りては夫或は戀人のかわりに女神自ら其娘の死を愁み、其娘ペルセフォネも亦其母デメタルと同じく植物の人格化なりは地下界の主なるプルトによりて花園の花咲き亂るゝ間より奪ひ去られ、其暗澹たる蔭の世界に運ばれ、母神は陸に海に其娘を捜し求むるのである、かくて女神の悲痛は

地上にある凡ての植物の成果熟生を止め、一般的飢饉の災害を護さんとするの恐あるを以てツォイス大神の諭告によりて半歳は其母と共に地上にすみ其半歳のみプルトに委せられたのである。この二女神の談、殊に其母神デメテルが悲愁と搜索の戯曲的表明こそエルーシアン神秘祭の主要なれり。この神秘式の始めの目的は單に儀式の魔法的表號によりて自然の豊饒を保存し助成するにありしことは疑はれない、然れど後に至りてこれによりて新參者に幸福なる未來生を保證せんとする感化を蒙つたのである。希臘人がオシリスと同一視せる、かのデオニソスも亦オシリスと同じく自然神の間に位したのである、而して其突然の死、四肢を絶つこと次に復活は種々なる形の物語となりて語られ、かくて同じ神秘的儀式を存するのである、其儀式中に在りて殊に注意すべき

は神の解体に關し崇拜者は牡犢の肉を齒にて噛み切り、牡犢に化身されたる神の永遠の生命を分配するため、其血醒き肉を含まむのである、この神秘的聖餐に於て神の死とは絶えず新にせられ且つ同化さるゝのである、

神の烈しき死に關する傳説と密なる關係を有するものは神又は其勇者が一時的に下界に下り又再び安全に歸り來ることの傳説なりとして居る、これらの中最も古きものはバビロンの神話イスタルの地獄行なるべし、其戀人タムムズを蘇生せしめんため生命の水を見出さんとして女神は、還らざる地に下れり、地下の門に達して彼は門番の許可を得んとて、若し拒まば門を破壊して其中に閉込められたる全靈を上界にひき行かんと脅かしたのである、慊ながら下界の女主は彼の請を許したのである、昔ながらの法律に

従つて門毎に其衣服のあるものをはがれ七門を経たる時は全く裸躰となして、其後に門は閉され鍵かけられ六十の病に襲はれたのである。

されど豊饒の女神が去りしために地上の人と動物とに對する全般の死の擴がらんとする恐慌生じたるを以て(前述デメテルの神話と同じ思想たるを知るべし)大神エアは勇者アスナミルを造りイスタル女神を救はんために地下に遣はしたのである。神たちの使者の命によりて地下神は、囚にせる女神を許し、生命の水にて彼女を洗ひ七門毎に皆彼女の衣服をかへしたのである。而して其神話の詩には如何にイスタルの戀人タムムズが生命の水にて洗はれ齋に塗られ生命に甦り、終に儀式に列する人の歡喜遊樂につれて笛のをもしろき音が吹かるゝかを記したのである。これはオ

シリヌ。アドニス、アツチヌ。デメテル。ペルセフォネのために行はるゝ春祭の儀式と異なる所がないのである。

この地獄行のバピロン神話と最も近き關係を有するものは猶太バピロン種族の一なるマンデアン人中にあるものなるべし。こゝに在りては神の勇者ヒビルーチワは造られ、地下に下り暗黒の龍を征伏し、地獄の女王を牢獄につなぎ、地下に閉込られたる善靈を皆光明の世界に導びき來られたのである。かのイスタルが脅迫せし如く地下界の門を打破り死者をつれ行くことは實際に神に使命されたる使者ヒビル、チワによつて善靈を導びき來られたのである。以てこのマンデアンの神話は異教が同じ思想のノスチック基督教の觀念に變化せんとする過程とみるべきものである。ナースセネ(オフイチツク)ノスチックの讃歌中其最初の部分に人

の精神が脱るゝ所を見出さずことが出来ないから地的生活の迷宮に彷徨ひつゝ種々の悲哀に相遇することを歌はれたのである。斯くて讃歌はすゝんで天の救世的靈キリストが次の如く父に祈りました。われを遣したまへ、われあらゆる保證を以て降り行き總ての時處に彷徨ひ、凡ての神秘を顯はし、神々の姿を知らしめ、「ノース」と呼ぶ神聖なる方式の隠れたる隠語を分配すべし」と。さればノスチック派の人々の思想によりますと救済は地のはてなく、天のキリストの靈が降りまして、神に反對する地と地獄との力に捕れました靈を力と彼等を支配する神秘なる智慧の方法とによつて自由にするに在ります。斯の如くに埃及人の智識によりますれば、地下界の靈は神秘なる名稱と儀式の所有及び使用に依つて悪魔的勢力の襲撃に對して自己を保護せねばならぬ。

地獄降下の神話は執中派のノスチック團體より教會的基督教に移り行き、この神話的思想は初代基督教會に廣く讀まれたる經外聖書及び使徒行傳等に屢々見出されるのです。例を引けば、ペテロの福音書の復活せるキリストは天の聲によりまして「御身は死に睡れる人々に從順を説けりや」と尋ねられ、彼の答は「然諾」なりき。これによつて察すれば、彼が死と復活との間は地獄に下り、陰の國の前に其支配者主として自身を現はしたまふたことを表したのである。如何にこの思想が初代基督教徒に大切でありましたか。又この基督教信仰の特別なる卓越が異教にある類似の神秘に勝れることを如何に熱心に高慢せしかは、舊き辨證論者として名高きアマイクス、マテルヌーが雄辨なる論辨によつて表されて居る。異教の神々の場合に於て、只彼等の死は知られたるも、其復活に至つて

は預言されず又自證によつて證據立てられない之に反して神の子は以前に約束せし所を完成するのである。彼は地獄の土地の門を閉ぢ死のいかめしい律法の魔法を破れり、三日にして悪き死が彼等を支配すること能はざる正しきもの群を集めたのである。彼等の功績が最早限なき失望に終はらざらんために彼は久遠の獄牢を破り開き其鐵の戸はキリストの命令によりて落下したのである。かくて地は神なるキリストの顯はるゝために其根底より震盪し太陽は其毎日の進路を過る前に夜に沈み暗黒は地の面を覆ひキリストは死の暴惡に反對して戦ひし時凡てのものみな動搖したのである。三日の間この激烈なる争鬪續いて遂に死の惡勢力は打勝たれ破られたのである。斯くて視よ三日の後朝は嘗つてあらざりし輝を以て明けたのである。日輪は光輝燦爛として全能の

神キリストに尊敬を拂ふて、恩惠ある神は勝利を得、正義の群聖き仲間彼の凱旋の戦事である。されば人類は喜にあふれ叫びて曰く、オー死よ汝の棘は何處にありやと、前方にすゝみ來る神の救主は天の門戸を開くことを命じて、開けよ開けよ久遠の封印を破れよと、キリストなる神は足の下に死を踏にじり死に捕はれたるものどもを天に呼び返へしたまふたのである。かくて天の番人は神の子を認め、彼等は破れたる敵の廢殘をみ、初めの命令を想ひ出し、彼等と天に昇り來るものとは共に歡喜の叫をなす。戸よあがれ汝番人よ榮光の王入りたまはんと、父は歸り來る子に王國の笏を與え、彼が永遠の神の威嚴によりて王國を統治することを得るために自己と同じ權力の王位を彼に許容したまふたのである。

希臘羅馬の傳説も亦多くの地獄に下りて後天に上るの説と相似

て居る、ホメロスが誌せるオヂソイスが黄泉に下ること及びこの思想より進歩して未來生の觀念を生ずるに至れるものは早く叙事詩に於て他の勇者が同じ旅をなせる物語となつて現はれたのである、テソイス、パイリトウス、オルフオイス、ヘラクレス、エニアス、ピタゴラスの物語はこれである、原始の傳說的詩想像及び宗教的觀察は皆これ等の傳説を進歩させることに殆んど同じ効力を有して居る、總ての中最も人口に膾炙するは神秘的唱歌者オルフオイスが下界に降り行ける語である、物語中彼は預言者、幻術者、罪過を淨むる僧として顯はされたのである、其人の默示によりてオルフイク宗は彼等の秘密なる教説と神秘の宗儀を造り、其の神的始原を認むるために、又其神秘なる儀式と遁世的實行とによりて、肉體に閉込られたる靈魂を自由になしてそれを永遠の生命に高め

ることを企圖したのである。

オルフオイスが事を誌せる中、彼が下界の旅路に於てみしこととして他界と其賞罰の詳細なる記録がある、此等下界に下り行きし希臘の傳説に於て重要なことは他界に於ける新參者の生命を保存するため、他界の消息を知らんとするに在りて彼をして直接に死に打勝つことを得せしめないものである、されど此の方面に對する思想の起りともみるべきものはヘラクレス物語に於て彼が下界の番犬チエルベルスを屈伏したりと云はるゝこととなつたのである。

昇天のことは種々なる形式によつて表はされて居るが、一部分は神の勇者又は神に愛された勇者が幸福の土地に移さるゝことゝ一部分は夢化の状態に於て靈の一時的向上、これによつて天への

道の階級と其危険を知るの機会を得ること、終末的觀念につゞかれて一般は信仰敬虔なる靈の昇天の幻影的模型として表はされるのである。希伯來の傳説中前者は只二例あるのみである、一はエノクにして、彼は地より上られ神に運ばる、他の一はエリヤにして火の車に乗りて天に上つたのである。

然し希臘の傳説には移靈は屢々あつたのである又其形も亦多様である、戦はエリシヤンの野に幸福の島に、洞穴に、山に、海の深淵に或は終に神たちの住みます天のオリムポスなる理想の高處に移されたのである。こゝにある觀念のもとには體も靈も全人が死の門を通ることなくして未來の幸福に直ちに運び去らるゝことである。されど後世に至りて懷疑論者出で來りてヘラクレス及びロミユルスの場合に於けるが如き昔時の傳説を疑ひ、こゝに只朽ちざ

る靈の移し運ばるゝことゝなつたのである。

さは云へヘラクレスの物語こそ種々なる點に關して、特殊の興趣がある、彼は父は神なるツオイヌ母は人なるアルクメネの子である、彼は生涯を以て嫉妬に深きヘラ女神が彼に加ふる反對の運命に抵抗せねばならぬ、彼は大事業に於て其神的力量を嘗験し、この世と次の世(誓合ば下界の犬)との反對の勢力と戦つて之に勝ちました、殊に彼は呪咀を受けし人の代表たるプロメトイヌを神々の加ふる罰より救ひ其械を打碎き、日々に彼が肉をさく隼ハヤブサより脱れしめたのである、終に彼は好んで自ら葬火にする薪の上に上り直ちにオリムポスのツオイヌの神の傍に運ばれ神々の神酒ネクタルを飲みて久遠の生命を得た、斯る神出の勇者が生涯は人類の安全のために苦るしむし奮闘より一層貴きものなかるべしとは物語の記者の

意志であらう。

昇天の傳説を有するものは單に歴史以前の神話的勇者のみに限らない、神的系統を有すとの口碑を有する歴史上の大人物にも移された。アレキサンダー大王の例によりて東邦マゼドンの帝王及び女王に神的榮譽の歸せられし以來、彼等はこの地上の生活の最終に死せざるのみならず、神に奪ひとられて永遠に生活するとの物語を生じたのである。スエトニユスの語る所によればデュリアス、シーザーは單に朝令によるのみに非ず、人民の確信の中に彼の死後は神だちの中に列すとせられた。アウグスツスの命により彼の名譽のために發布されたる競技の時七日間彗星が天に顯はれたのである。これは天に昇りし彼の靈と考へられたのである。又アウグスツスも火葬の薪に彼の遺骸が炎かれしをり其靈天に昇り、

其時の奉行は誓約の下に帝王の靈天に昇れることを證據立てられたのである。スウエーデンのオクタヴィアス一〇〇(後代に至りて帝王の葬式の時総は葬薪より飛び上らせられたのである。彼れ帝王の靈を天に運ぶとの信仰に基く、嘗てペレグリヌス、プロトイスが其模範とせるヘラクレースの例に倣いてオリムピアに於て生涯の終焉に當り火焰の裡に自身を投ずるや、高貴なる一老人唱へて曰く彼は火焰の外に鷲の飛び上るを見、ペレグリヌスが變貌して白衣を纏ひ其頭に勝利の榮冠を戴けるを見たりと。この後直ちに彼は其故郷に於て神として崇拜せられ、彼の神壇に於ては神託あり且つ奇蹟的治療行はるゝと云ふ(ルシアン及びアナクサゴラスの記録による)。彼の有名なるチアナのアポロニユスが最終のことに関して種々なる傳説流布されたのである。リンツスのア

ナナに在る宮居やクレンナのチクチンナに在る神殿に於ける神秘的失踪のこゝとあり而して彼が傳記家フィロストラッスはアポロニユスが墓の孰れにもなきことを以て彼が神に祀らるゝ確證となしたのである。

初代基督教徒が基督を主とし生命を與ふるものとして信仰せし本質は彼の名を信じ彼の名にて洗禮を受け、主の晚餐によりて彼の肉と血とを分配するてふ觀念に基くものがある而してこれ等の三點に對する多くの比例は東西兩洋の宗教的歴史に見出すことを得らるゝのである。

ハイトミエーレルが好著「イエスの名にて」中聖書及び聖書以外の宗教にある名によりての信仰に關する原理と實行との材料蒐集せられたのである、今これより唯數例を引くに止め、古き宗教に於

て名は決して單なる言葉或は意象に非ずして、それを有するもの性質又は運命に密接なる神話的關係を有するのである、實にそれは彼の本體又は効驗ある勢力の獨立的代表として表はさるゝのである、名を變ずることは其人の復生又は舊名に屬する運命より救助さるゝことを表はすのである、人の名の上に呪咀をなさば其人に危害及ぶとせられたのである、或神又は惡魔の名を知りてこれと呼ぶ人は彼が有する善意或は惡意、例令ば保護或は攻撃等の用をなすに當つて其人に或力を賦與さるゝと、かくて妖術の總ての種類に於て神聖或は神秘なる名を呼ぶことゝなれるものゝ如きである。

又一方に於て神の名に訴へることは神を祈るものに近づき、こゝに新しき關係を生ずるのである、されば祈るものは危害的勢力に

たいして護身されると、ヤーベの名によつて祝福されるものは神の保護力を得、彼の特別なる加護の下に有るのである。大なる神だちの名によりて神々の使者アツスナミルは地下の女神に懇願しイスタルを許すやうに女神を強ふるのである。暗黒界の隠語を誌されたる印刻指輪によりてヒビルチアは地下界の門を通ずる路を無理強に通過したのである。又天上界の門を仕配する靈力の名稱を知り之を唱ふることによりて精靈は天への旅路を通ずることを得、トーマス行傳に在る精神の歌にある王子は其父母の名によりて蛇を恍惚として睡らしめ、天界に還ることを得るための眞珠を其保護せる蛇より奪ふことを得たのである。エールジニア及びオルフイ神秘の新來者は神秘の名を知りて來らんとする世界の幸福の特權を得たのである。フリギアの神秘に於て僧侶等は自ら

神と一にせんとて神アチスの名を有つ、ライテンの幻惑的書第二に於て次の句あり「汝はわれ、われは汝なり、われは呪符として、汝の名を心に有するが故に、わが言ふ所は總て實行さるべし、假令立つとも總てのステツクスはわれに勝ち能はじ、何ものもわれに抵抗せず、わが心に持ちわが口に唱ふる汝の名のために如何なる靈も悪魔も黄泉の力もわれに及ばじ、オ、慈悲深きものも總てわが言をきけ、襲ふべからざる健康と平安と成功、名譽、勝利、勢力、温順とを與えたまへ。この信仰に従へば、神聖なる名を信することは、心に之を有ち而して祈禱さるゝものによりて現はされたる超自然力に充されることと同じく、又、其名を呼ぶことは、單に言葉の上の形式に非ずして超自然の力と關係を生じ、其力彼に現はれ驚ろくべき効

果を生ずることを意味するのである。

斯る思想を基督教の上に適用すればイエスキリストの名を信じ、彼の名を呼ぶことは即ち神の子、サタン及び死の勝利者、世界の奇蹟的救主の性質と神秘的關係を結び而して彼に特有なる總ての生活力を得んとすることである。名力を信ずる昔時信仰の神秘及び教義は只こゝに説明せられたるのみに非ず實にこれは眞正倫理且宗教的價値ある精神的經驗の内容に向つての一機會となりしことである。言を交ゆればこの信仰よりして道徳的の向上を得たのである。

基督の名によりて洗禮することも亦之に同じき思想を有すると同時に水の聖式的潔淨と活氣を賦與するの力とを加ふるのである。斯る基礎を有する觀念は總ての國民に通ずる信仰及び禮拜の

中に認むべし、イスタルが地獄に下りし神話は同じ思想の根本を有すとみるべし、彼女はタムムズを甦生せしむるために「生命の水」を得んとて降下したのである、彼女は六十の疾病に襲はれたりしが地獄の女王の命令によりて、地獄のニンフ等によつて生命の水に洗はれ、再び健康の身軀を有して地上に還歸することを得たのである、而して後タムムズは活水に洗はれて甦りたり、こはタムムズの月即ち七八月に於て夏の祭に於て戯曲的に表はされたのである。

アドニス祭に於て神の像——時としては人間の形に造り時としては植物の形に造りて——を水中に投ず、これ、この表號的魔法によりて豊饒の神の復活をなし遂げん爲なのである。埃及のオシリス祭にも亦水瓶の神の名譽のために其列の頭初に運はるゝのである。

これ、水はオシリスの吐氣即ち神の物質として考へらるゝが故である。

弘く去來して廣布する潔禮は斯の如き假定の上に立つ即ち水の内在的神力は惡魔と其汚毒とを排除し得べしとするに在る。波斯人のうちに在りて死體に觸れて汚れたるものは水を注いで彼より惡靈を追出すのである。斯くて惡靈は水に觸れたる四肢五體より漸々退き終に左足の指先より逃れ出ると信せられたのである。羅馬及び希臘に於ても葬式に列せしものは神聖にされたる水によりて汚穢より潔めねばならぬのである。而して又精神原主論的觀察點より※罪惡、辜惡、疾病、死等は惡魔の汚辱なりと考れたるが故に斯る時には併出する泉より掬ひ取られたる水にて洗はるゝことは其罪辜より洗ひ去らるゝの方法と考へられたのである。

三四世紀に下つて、効果ある洗禮の方法として魔法的書籍の中には三或は七の泉より取りたる水、殺人罪は十四の泉より取たる水ならんには充分惡靈より潔むることを得べしとせられたのである。

又惡鬼を追出し彼等の害惡ある感化を退くるに足る水の同じ神の勢力は神の感應と熱情との事情に人を運ぶ便利なる靈力を賦與するものとせられ、デルファイのアポロ神の巫女ピチアはカスターリア泉の一吸飲によりて神の靈に充され預言するのイニスピレーション感興を得とせらるゝ如きは其例である。洗淨的聖なる神秘式は單に清淨の方便のみに非ず同時に復生又は神の不死的生命を分與すること或は復活等の方法と考へられたのである。テルツリアンの言は所によればエルユシアン神秘及びイシス又はミトラの神秘に於て

新來者は其罪の洗除及び復活の表號として水に浸さるゝのである。アブラハム、イサスのメタルモルフオセス書中に在る記録によりて一層この事實を確むることを得べし、又此頃發見されしミトラの騰式をみる時はポロが洗禮をキリストの死及び復活に關る表號として考へし思想(羅馬書第四章)と相通するものあるを知るに足るべきである。

斯く基督教と他の宗教との間に存する相互の類似の甚しきものあるを見て、タルツリアン及び其他の辨證論者をしてこれ畢竟基督教の儀式に似せたる悪魔の行爲となせるも無理でない、されど事實は然らず、靈魂論的自然宗教に通ずる根元的類似の表現なりと説明せねばならぬである。

(この一篇は博士フライデレルの筆になれるものなれ共人生疑

義の解釋參考の一として其一部を譯しこゝに收めたのである。

爾曹は世の光なり、
山の上に聳ら

れたる城は隠るゝことを得ず。

(十五) 新らしき天地

「獅子が若し神を畫くことあらんか、彼は獅子の像に之を畫かん、馬ならば馬に、牛ならば牛にぞ畫かん」とはクセノファネスの嘲弄の句であるが、これは吾人より見れば非常に深奥な意味を持った句として、この儘に吾人の神觀として受入れてもよいと思ふのである。吾人が神を考ふるのは確かに人間の様に考ふるより外はないと信するのである。神を父と信する吾人の信仰は既に以上の諸論文に於て讀者の認めらるゝ所であらう。吾人が神を畫くのはこれよりもより善く、これよりもより以上に又これよりもより高く畫くこと能はざるが故である。人間歴史の上に神が如何に表明せられたかを研究したるものは神は時代くによりて異なり來れ

るものあることを知ることが出来る。人間の智識未だ啓發せず、一見識幼稚にして、經驗の未だ狭き状態に在るものの神の思想は實に愚昧のもので、人間の境遇や、進むに従つて神の性質もや、進歩し來つてをる。斯く云へば神は人の創造する所なるが如しと思ふものがあるかも知れぬ。神は自ら存在するものである。しかも神を思索する吾人には進歩がある。發達がある。決して吾人の達したる程度に在りて吾人の凡ゆる理想以上に考ふることは出來ないのである。否之の外には認識することは出來ないのである。それで、人なければ神なしと云ふ言葉さへ、右の様な思想の見地から申せば決して誤謬の考でないと思つても差支がない。而してこの人間の達した境地より神の性質を申せば、神は父である。愛であると云ふ言葉位、神を表明するに最も深く又適當なる言葉はないと思は

れるのである。

神は凡ゆるものに自己を現はしたまふものなりとは既に論じた所である。而して此顯現は尤もよく人間に於てあると申さねばならぬ。獨逸の諺草に「神は石の裡に眠り、動物の裡に夢み、人の裡に醒む」とある。至妙の言ではないか。凡ての被造物は神を現はすものである。神の方面から申せば實に自己を卑くし謙遜して萬有に自己を空うしたまふのである。而も自然には只その法則と規律と美とを發揮したまふ様である。動物に至りてはやゝ其智慧と道德性とを顯はさんとしたまふた。然るに人間に至つては其美も、其眞も、其善もいよく明晰に之を發露せんとしたまふのである。この凡ゆる神の性情を充分に發現したまふたる人が神を考ふる時に、自己を通して、こゝに人間の最も高き理想を見て之を表せんとする

言葉は父と愛とであるならば之にました神を表明するの仕方は外にないと申しても差支はないのであらう。否人間の進化の今の程度に於ては之を以て最もよき神を表明する言葉とすることは決して誤謬ではないのである。

吾人既に斯の如き神を信するのである。而して其上に人生々活の妙趣を探らんと試みてをる。其種々なる人生々活と萬有の上に表現し來る現象に對しては如何なる思念を以てすべきかは凡そ論し盡したやうに思ふが今この新しき天地に在りて吾人がいよいよ神に接し、神を明らかにせんためには如何にすべきか。これは是非、人生疑義の結論としても考察せざるべからざる點である。

神を信するものには苦痛も、寂寞も、悲哀も、不幸も、災殃も、死も及ばざるべしと考ふるものがある。斯る保證が神信するに伴なうと

思ふのは一の迷信にすぎないのである。神を信することは神が斯る不幸悲運の裡より吾人を救ひ出すことを信することではない。しかし神は斯る境に在る我と共に在りたまふと云ふことを信するのである。斯る事件は寧ろ彼の使命を帯ぶ代理にして、われを害するものに非ず却つて、われに使ふるものである。詩篇の記者は、エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ、エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にとまひたまふ、エホバはわが靈魂をいかし、名のゆるをもて我をたゞしき路にみちびき給ふ、たとひわれ死のがけの谷をあゆむとも禍害をおそれ、なんぢわれと共に在せばなり、なんぢの笞なんぢの杖われを慰む」と誌してをる。使徒ポロは「神の愛より我儕を絶らせん者は誰ぞや、患難なるか、或は困苦か、迫害か、飢餓か、裸程か、危険か、刀劍なる乎、是われら終日な

んぢの爲に死に付され、屠られんとする羊の如くせらるゝ也と録されたるが如し、然とも我儕を愛める者に頼すべて此等の事に勝得て餘あり」と叫んでをる。

而して吾人が神を知ること益々深く、益々密なる方法としては吾人自ら神の如くに苦るしむ、神の如くに働ぎ、神の如くに務め、神の如くに宥るし、神の如くに愛しむ、神の心を心として生活することより外に適切な方法はないのである。吾人が智慧と感情とは確かに神を知るの大切な機關である。しかも吾人が神と共に働き活きることは最も大切なことである。

この生活の最も向上せるものは祈禱である。祈禱は神的生命の呼吸である。否、宗教的生命、生活そのまゝのものである。吾人の敬虔、信仰、内的生活の呼吸は到底神と間断なき交通を欠いでは發達する

ことも出来ず満足することもなく、和調を得ることも出来ないの
 である。而してこゝに我心と神との直接の交通融合はこの祈禱を
 通して得られ完ふせらるゝものである。而してこの我と神との交
 通が一の形式でなく一の靈的生活精神によりてなされるゝ状態は
 祈禱と云ふべきであるが、この祈禱によりて吾人はいよく神に
 近づき、又神を知り、神を味ひ、こゝに神的生活其ものゝ内に没入す
 ることが出来るのである。

この境地に悟入するものは實に最も自由なる新天地に優遊する
 ことの出来るものである。斯くてこの新しき立脚地に立ちて人生
 を顧みんか、人生はいよく其深き妙趣を發揮し、光明を輝やかし
 來るのである。斯る貴き人生生活を吾人に賜ふた神の愛は感謝し
 又讚美すべきに非ずや。かくて一度は過つて穢土と思ふた天地は

實に一大淨樂の天地であることが解せらるゝのである。

心の清きものは幸福なり、其人は

神を見ることを得べければなり。

人生の疑義終

明治四十三年六月四日印刷
明治四十三年六月九日發行

定價金五拾錢

著作權
所有

著者	赤司繁太郎
發行者	東京市日本橋區上橫町十番地 寺本安之助
發行所	大阪市東區北渡邊町八十九番屋敷 杉本要
印刷者	東京市神田區表神保町一番地 安田德治郎
印刷所	東京市神田區表神保町一番地 健捷堂

發兌元

東京市日本橋區上橫町十番地
千代田書房

發兌元

大阪市東區北渡邊町八十九番屋敷
杉本梁江堂
振替貯金口座東京二八二三番

元賣發書圖兌發房書田代千

同 京市神田區表神保町	東京堂	東京市神田區表神保町	武藏屋
同 神田區裏神保町	上田屋	同 日本橋區下槇町	文星堂
同 日本橋區本銀町	大洋堂	名古屋市玉屋町	星野書店
同 日本橋區本石町	至誠堂	京都市烏丸佛光寺	東枝律書房
同 日本橋區大傳馬町	文林堂	大阪市東區備後町	寶文館
同 京橋區元數寄屋町	北隆館	同 北區東梅田町	盛文館
同 日本橋區數寄屋町	六合館	同 南區心齋橋	文海堂
同 京橋區中橋廣小路	文榮閣	同 東區北久太郎町	積文社
同 京橋區尾張町	東海堂	久留米市米屋町	菊竹書店
同 京橋區南傳馬町	目黒書店	熊本市新二丁目	長崎書店
同 京橋區南鍛冶町	三松堂	韓國京城本町	日韓書房
同 神田區錦町	二松堂	關東洲大連大山通	大阪屋

安部磯雄赤司繁太郎共著
版四
理想の青年

四六版全一冊 金四十錢
郵税六錢

如何なる時、如何なる所に於ても青年は社會の柱石たるべし青年を離れて凡て人生の
 事生氣なく、精神なし、青年の修養是に於てか一層の重きをなすべし。
 本書は安部、赤司兩先生が青年の精神修養の資にとて説ける所、一度本書を精くもの
 嚴父に接し慈母に見るの感あらん。

本書に對する批評
 (萬朝) 理想と青年、幸福ある生涯、生活の
 疑問、宗教の味、現代の要求と宗教等の題下
 に人生の根本問題を論じたるもの、迷へる青
 年悲觀せる青年等は一讀すべし
 (讀賣新聞) 本書の上中は安部氏の筆に成り
 其下中は赤司氏の筆に成る兩者共に基督教の
 鼓吹者にして其現代青年の爲に理想を説く精
 髓也
 や高きものなり願ふに今の青年は理想を求め
 て得ず宗教を求めて得ず彷徨寄る所なきもの
 極めて多きが如し本書彼等の爲に一杯の水を
 與ふるだけの功なしとなさざるべし
 (國民新聞) 青年に對する教訓として兩氏の
 物質界、精神界に亘りて講述せる物所説は靈
 髓也

赤木下尚江卷頭語
司繁太郎著

再版

青年と人格

四六版全一冊

金四十五錢

郵税六錢

五千萬の我日本國民に人格の必要を説くは何人もせる處なるが殊に著者が最近數年間に或は宗教上、道德上の見地より青年即ち第二の日本國民に人格の尊ぶべきことを極論し來りたるは世人の知る所にして本書は此等著者が青年の爲めに其熱血を注ぎたる論文集にして現代の青年及青年を有する父兄及教導者及將來青年の配遇者たるべき淑女諸君及此等の淑女の父兄及教導者の坐右一日も缺くべからざる青年人格論にして又恰好の一多善典也敢て一讀を希ふ

伊藤銀月新著

最新刊

彗星的人物

洋裝全一冊
定價金六拾錢
郵税金六錢

彗星的人物とは誰々なる歟は讀者の推測に任ずと雖も就中平將門。大石良雄。明智光秀。文覺上人等を主題とせるものは千百の死史を一掃するの奇創の觀察也

貴族院議員 松岡康毅先生序
從二位勳一等 松岡康毅先生序
講國學院大學 師宮内鹿川先生解題

溪 百年先生著

易經詳解

ポケット形
總布綴製ギルト
附金文字入箱入
紙數七頁
定價金一百圓
郵税 八錢

孔子の易を見るや單に之を卜筮の書となさず、寧ろ之を以て活道の大本、人倫の
根底とせられたり。上は治天下の大業より下は吾人が吉凶禍福進退存亡の理に至
る迄盡く包羅せられざるなく、伏羲氏以下四聖を経て完成せる最古の大寶典也。
歴代學匠の説實に枚擧に違あらざるも其意義大深遠にして、未平易通俗の書に乏
し、本書は訓譯解釋最も懇切にして平易なれば、苟くも易に志す者、道に志す者
共に好伴侶たるを信す。希くは東洋無二の此寶經を手にして、諸紳が處世に一曙
光を得玉はんことを。

島村抱月先生序

彗星先生著
節軒學人批評
小杉未醒書

學生生活 バンカラ日記

釘裝美本
全二冊
各金五拾錢
郵税金各六錢

バンカラ生一年間の日記也武士道鼓吹の青年ありハイカラ女學生あり兄妹男女
老幼其學校と家庭に出入する十の人物書中に躍如として現はる、諷刺、教訓、
叙情、叙事、紀行、論談、詩歌あり、戀愛失戀あり、巧みに當今男女學生の表
裏兩面を解剖して又餘蘊なし小説以上の興味趣味無盡藏にして又日記文例の好
模範を示せる近來無比の快著也

歌 迎 の 談 辭 雷 の 如 し

伊藤銀月新著

三 版

秀吉と家康

全 定價各冊
二 金六十錢
冊 郵稅各六錢

建國三千年來最も興味深き彼の戰國時代の真相を詳説し信長以下群雄割據の狀著者が健筆によりて縱横に批評せらる本書を讀むもの身自ら戰國に人となるの感あらん秋夜燈下の最良好伴侶也

伊藤銀月新著

第三版

海舟と南洲

洋裝全一冊
定價金六十錢
郵稅六錢

錦旗東征して函嶺に至るや海舟南洲の二人あり一夜一言一諾の下に江戸城明渡成る此二人者無かりせば我千代田城下八百八街は盡く官幕兩軍の戰場として應仁亂役の京都たりしや必せり海舟は隠捷して風月を友とし南洲は征韓を唱へて空しく城山の土となりぬ今や黒雲韓國に横り世人大西郷を想ふの時著者獨特の史眼を以て此二英雄の生涯を叙す筆端熱血溢るゝが如く熱淚紙上を沾するも亦故なしとせんや希くは一讀を玉へ

伊藤銀月新著

第二版

南朝と北朝

洋装全一冊

金六十錢

郵税六錢

「伊藤博文公」海舟と南洲を著はして本書に及べるは
總括して、或る活ける宗教の經典を作るべき著者
の微意なると共に、亦一面に於ては嚴密なる史實
ならずとせず、重野安繹、久米邦武、谷本富、山
路愛山等先輩學者諸氏と意見を異にし、國史研究
に一生面を開く。

伊藤銀月新著 第五版

伊藤博文公

洋装全一冊

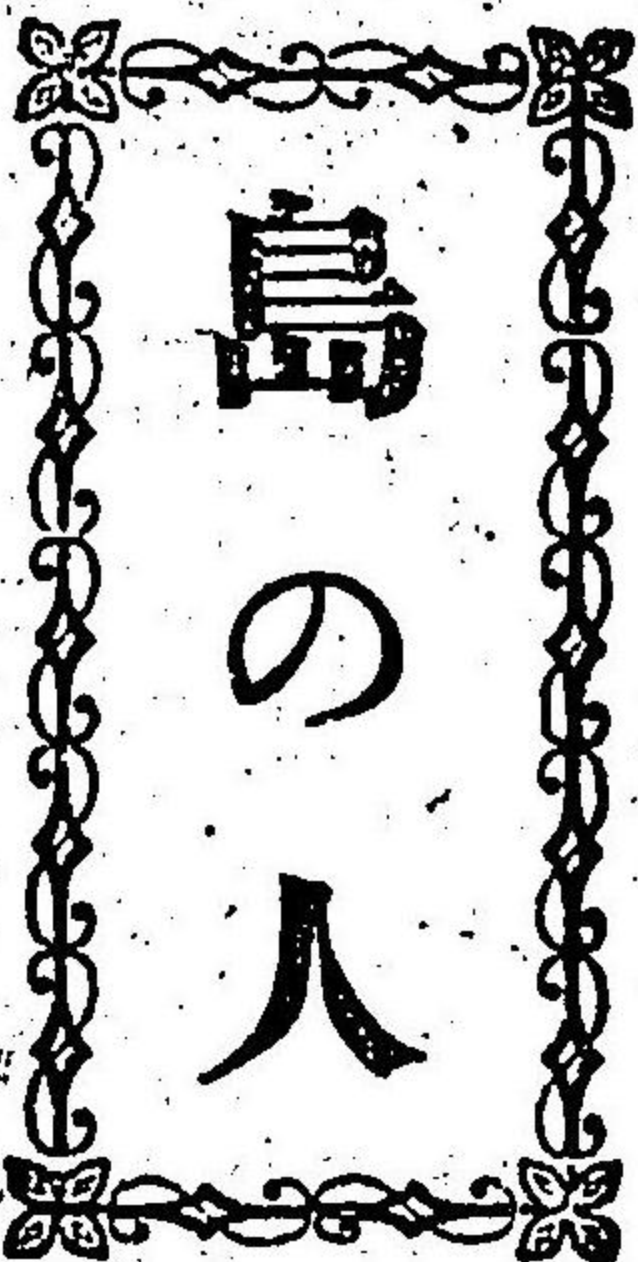
價金六十錢

郵税六錢

明治中興第一の功臣伊藤博文公は實に世界的偉人なり。著者
平生公の人物を研究して特殊の見識を有す。公が人物の真相
其如何にして成功したるか。何故に秀吉以後唯一なるか。國民
は公に何を學ぶべきか。等は本書を見ずして知る能はず。乞ふ
糊と剪刀との一時的粗製品と同視する勿れ

好 評 の 小 説 二 種

大倉桃郎著



松洲装弘光畫

小栗風葉著



中澤弘光畫

日露戦役に剣を片手に
一年の筆を馳せてかの
傑作「琵琶歌」を創作
し、近頃小説壇上の雄將
たる月桂冠を得たる著
者が最近の傑作即ち本
書島の人も満都の子女
紅涙を禁ぜざるもの即
ち本書島の人を致して一
體を希ふ

クロク綴三色版入美本
金六十五銭郵税八銭

紅塵万丈の都會を去て
我風葉先生放郷に歸ら
んとするの日、小房に
附するに此府を以てす
是先生が都會觀察の離
別集にして耽溺以下八
篇皆先生苦心憐愍の傑
作を蒐む諸君が秋夜燈
下に逸すべからざる良
書也

クロク綴箱入美本
金五十八銭郵税八銭

川岸華岳著

机上便覽

八

好

版

評

字畫辨

誤字を書かぬ方法即ち七萬の漢字を僅かの時日で正しく書ける原理原則を最新なる工夫を以て説明してある。

似字辨

能く似た字を根底より説明し書き誤ることのない様にしてある。

同訓辨

至、到。船、舟。脂、油などの同訓の區別を巧みに説いてある。

草書字引

楷書を如何にしてして草書にするかを漢字字引に示したものでこれだけを記憶すれば七萬の漢字を崩す事容易である。

(定價金六十銭 郵税金四銭)

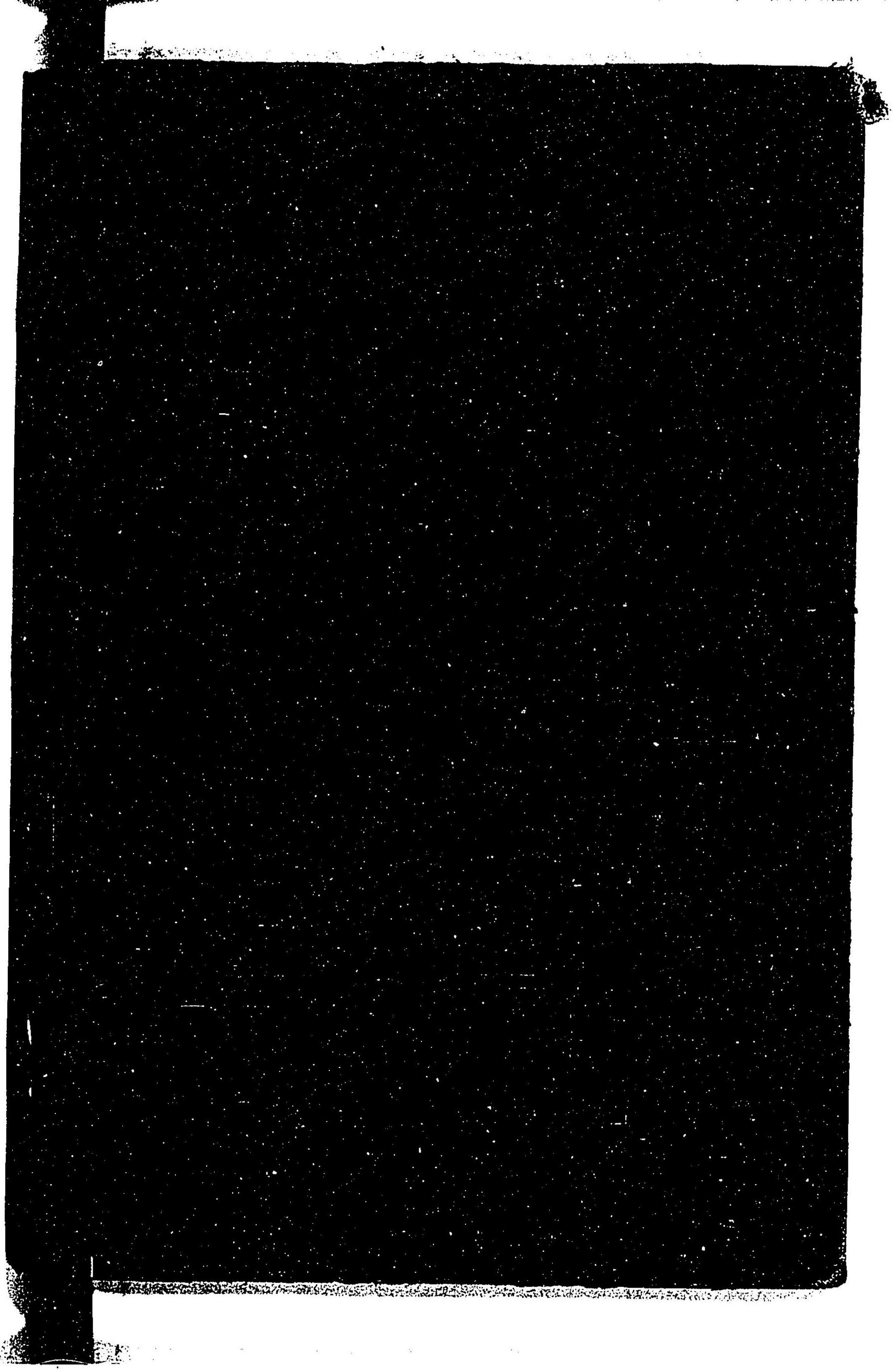
抄手雄龍井雲

錄習傳明陽王

形トツケボ裁半判菊
錢六稅郵錢五拾六金

王文成公の傳習錄中より雲井龍
雄先生が其識見を以て拔萃せし
ものにして杉原夷山が和譯訓註
を加へたる以て本書の眞價を知
るに足らん天下の人何人も本書
を逸すべからざる近來の珍書也
乞ふ愛讀を至へ

96
179



020818-000-0

96-479

人生の疑義

赤司 繁太郎 / 著

M43

ABI-0644



